
ラセン

丹歩々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ラセン

【Nコード】
N2524Y

【作者名】
丹歩々

【あらすじ】
お断り

同一題名
「ラセン」

作者：夢咲 春風

は私、丹歩々の作品です。

- あらすじ -

遙か昔、一人の人間が殺人を犯し、その罪の自責により、自殺した。その人間の魂は、神の造った「定め」に従い、地獄という場所を用意された。

慈悲深い神は、それらの魂を救うため、再び地上に再生させた。

再生された魂は、また地上界で自由を得た。

はたして、再生された魂は、また繰り返して罪を重ねるのか？ 逆に善行を以って、罪を排除出来るのか？

魂の浄化の闘いが、始まる。

第一章・セバスチャン

そこは、罪を犯して死んだ靈魂たちの、償いの場所であった。

その場所には、多くの靈魂たちがあつた。

その靈魂たちは人間の型をしていたが、男でも無く、女でも無かつた。

靈魂たちは、個々に与えられた、黒い球の中にいて、孤独であつた。

その球は、光が完全に遮断された、ゴムのような膜であつた。

靈魂たちがどのようにあがいても、出ることは出来なかつた。

球は、魂たちの、怨念の深さに応じて、廻り続けていた。

ゆっくりと廻る球もあれば、破裂しそうに廻る球もあつた。

靈魂たちはその速度に応じて、歩き、また走らなければならなかつた。

その球は大きくなり、直径が等身大であつた。

靈魂たちは圧迫の恐怖にもいた。

聞こえるものは、外の球の呻きの声だけであつた。

それらが球の中で、自分の呻きと共に、共鳴していた。

外の呻きも、決して休息する事はなかつた。

球の回転に追いつけずに、足を取られ、バランスを崩して転がる靈魂たちがあつた。

転がると突然球体は、鋭いの刃を突起させた。

靈魂たちを立たせるためだ。

地面に横たわる事すら、許されなかった。

その刃の数も、怨みの数に比例していた。

靈魂たちはその度、強烈な痛みを受ける。

鈍い音を発てて、靈魂体に、強烈に突き刺さる。

臭うものは、靈魂に突き刺さる、刃の摩擦の焦げた臭いだけであつた。

さらに、玉の中の気温は、灼熱と極寒が交互にやって来た。

地獄とは”永遠に救われない”と思う認識の中にあつた。

そのような玉が、その場所には数えきれないほどあつた。

常に新しい玉が、天上からゆっくりと落ちて来ていた。

それは一つのもの、また二つにくつついたもの、などがあつた。

苦しみだけに集中させられる世界。

そこは神が完全に見捨てた、爬虫類の卵のように、薄暗い平面に置き捨てられた世界であった。

幾年分の時が流れただろうか、その中の一つの球に、変化が起った。

ここにある靈魂達は、球に入ったとたんに前世の記憶は無くなる。

しかし、その球の一つの靈魂に、前世の記憶が、突然沸き起こった。

「ごめんなさい」

と靈魂体が叫んだ瞬間、球が真つ二つに割れ、光が溢れる世界が現れた。

その光り輝く世界には、二本の木が、並んで立っていた。
輝きの源はその木であった。

現れた空間は、平面が無く、木も靈魂も宙に浮いていた。

木が放つ光は、下にも上にも、前にも後ろにも四方を輝かせていた。

その木の大きさは計り知れなかった。

四方に伸びた枝々は、放つ光の眩しさで、どこまで伸びているのか、分からなかった。

その幹は、常に伸び続けていた。

靈魂は、その輝く木の前に平伏した。

その靈魂はなぜ、自分があの玉の中に入ったのか、地上界で犯した罪の記憶が完全に蘇った。

「セバスチャン」

輝く木が語った。

「私は命の木であり、善悪を知る木です。
またアルファであり、オメガでもあります。」

セバスチャンと呼ばれた霊体はその時、地上界を去って直ぐに、この輝く木と対面した事を思い出した。
その時に言われた言葉を思い出した。

「罪深い靈魂よ、
あなたを私の国に、迎える事は出来ません。

あなたの魂に相応しい世界に、行きなさい。

再生は、今は許されません。」

と言われたのを、思い出した。

再度対面した今、靈魂は、輝く木の前で懺悔した。

「木よ、おゆるしく下さい。」

輝く木は、靈魂に言った

「再度の試練です。

あなたの未来から、私に言葉が届きました。

その言葉とは、あなたの来世が、私に「許しの言葉」を叫びました。
ゆえにあなたの球を私は、今割きました。」

（その靈魂はずっと球の中にいて、なぜ未来から声がしたかは、その英知を解明出来る人間はいない。）

靈魂は感慨に答えた。

「ご慈悲ありがとうございます。」

輝く木は、さらに続けた。

「あなたは、前の世で、二つの過ちがあります。

一つは、人間を殺したこと。

もう一つは、天命に背き、あなた自ら、命を絶ったこと。

浄化するためには・・・」

輝く木は、セバスチャンに全てを語った。

そして輝く木は、最後に語った。

「セバスチャンよ、行きなさい。

次の世で、罪を浄化するのです。」

というとセバスチャンは、この会話の記憶を奪われた。

セバスチャンはその場に倒れて深い眠りについた。

輝く木が与えた救いの場に、セバスチャンは旅立った。

次元を幾つも超えて、新たな救いの人生が始まった。

人間には、到底理解しえない「神の許しの身業」がここに現れた。

輝く木はセバスチャンの再生のため、その靈魂を再び地上に蘇生させた。

セバスチャンの生まれ変わりである「井上佑一」は、もちろん前世の記憶などなく、完全に人間として生きていた。

輝く木は、彼を蘇生させ、再び自由を与えた。

自由を獲得出来たセバスチャンは、また何をしてもいい権利を獲得した。

前世の時のように人を殺し、自らの命を絶つ事も自由である。

セバスチャンは自由を獲た替わりに、輝く木は、口出しする事も無くなった。

「神の沈黙」

という地上界の摂理がセバスチャンに入った。

井上祐一（セバスチャン）

その夜、空は多くの星座で輝いていた。

初冬の、そこ冷えする冷氣の中で、星座の配列は崩れる事なく、永遠に型にはまった版画のように鮮明であった。

冷氣は、星座の光りが放つオーラと結合し、威厳ある目に見えない固体のように、地にある全てのものを支配していた。

井上祐一は帰宅した車から降りると夜空をしばらく仰いでいた。

それらの星々の輝きは、悠久の光を祐一に注いでいた。

「何千年前の光を浴びているのだろうか。」

仕事の煩雑さが、祐一に自然の中に溶け込む余裕を奪っていたが、その日は一年係りのプロジェクトがほぼ成功したため、余裕が導くように夜空に眼を行かせた。

祐一は知っている星座の形を追った。

それらの形は懐かしい郷愁の思いを抱かせながら、心の中に溶け込んでいった。

あたかも誰かに抱き締められているかのように、心が落ち着行った。

しかし次の瞬間に突然、祐一の心に言い知れぬ「恐怖心」が襲って来た。

オリオンの中芯から、刃が落ちて来る光景が脳裏に浮んだ。

「疲れているんだな。」

佑一は恐怖心を振り払い、誰もいない、温まっていない、我が家へと入った。

佑一はソファで音楽を聴きながら、ワインを楽しんでいた。そこへ携帯が鳴った。

「私だけ・・・」

別れた妻の真由美である。

「リサの運動会、来週の日曜日なんだけど・・・
あなた出てくれないかしら・・・」

「ああ、願ってもない事だけど・・・
君達は・・・」

「私達、ちょっと新居の事で出かけるの・・・」

彼もその日しか時間がなくて・・・
早口にまくし立てる。

もうそうすべきなの、と言いたげな口調である。

「いいでしょ！」

貴方の一人娘に会わせてやるんだから！」

祐一のグラスを持つ手が震えた。

「分かった、学校直接でいのかな・・・」

別れた妻の今の夫は、祐一の取引先の男で田中誠という。

別れた妻と誠との出会いは、スポーツサークルであった。

誠は身長が高く、細身で、情に篤く、女性より気が付く男である。

真由美は、祐一と誠が面識がある事は知らずに接していた。

誠は七年前に奥さんを亡くしている。

子供は居なかった。

誠は真由美と一緒に境遇と思っていたらしい。

「私も夫をなくしたの。」
の言葉に誠はだまされた。

「なくした」と言う言葉を誤解させ、真由美はたくみに誠に接近した。

真由美は、独り身になった誠の寂しい心の隙間に入り込んで行った。

誠は三十半ばで、一流商社の取締役営業部長であった。

真由美には魅力のある肩書である。

誠は真由美を愛した。

真由美も初めは、誠を愛した。

祐一達の結婚は十二年で終わったが、真由美は三年前にデザイナーの会社を立ち上げ、社長であり、自立出来るほどの収入になった。

その頃から、真由美は祐一をさげすんでみるようになっていった。

祐一は妻の変化に耐えていた。

妻に新しい男が出来た事は、薄々感じてはいたが、まさか取引先の、懇意にしている誠であるとは思ってもいなかった。

妻と離婚したあと、

誠から籍を入れた事を申し訳なく告白された時は、祐一は全く冷静でいられた。

「申し訳ございません。」

「いや、気にしないでいいよ。」

これが彼女の望みであれば、それでいい。」

祐一は誠に対して好感を持っていた。

祐一に怒りや憎しみは沸いて来なかった。

いや、かえって真由美のさげすみのまなざしから、開放される喜びの方が大きかった。

ただ、一人娘のリサと別れる事だけが、悲しとして残った。

しばらくして、今度は電話が鳴った。

会社の経理主任の、山口亜利紗からである。

「夜分遅く申し訳ございません。」

山口です。

部長、今回のプロジェクトの成功、おめでとうございます。」

「ああ、山口君か、ありがとう。」

お陰様で何とかかなりそうだよ。」

「本当におめでとうございます。」

部長は人一倍、ご苦労なされましたので・・

ぜひ一言言いたくて・・申し訳ございませんでした。」

亜利紗は話しているうちに込み上げてくるものがあつたのだろう。
すすり泣く声が聞こえた。

経理主任といつても、山口亜利紗はまだ三十歳手前である。

スレンダーでスタイルがよく、ロングの髪をなびかせて歩く姿は、
モデルと言つてもおかしくない程である。

社内で、亜利紗に興味が無い男は、ほとんどいなかったが、あまり
の容姿と心の美しさに、皆、高値の華と諦めていた。

独身で、礼儀正しく、おまけに優しい性格なので、浮いた話もあり
そうなはずだが、佑一にそのような話が伝わって来た事がなかった。

「ご家族団欒の中、誠に申し訳ございません。」

「いや・・・」

今日は一人なんだ・・・」

「お一人・・・」

奥様やお子様は・・・」

「いや・・・」

ちよつとね・・・」

「そうでしたか・・・
失礼いたしました。
では・・・」

部長、おやすみなさい。」

離婚したことはまだ数人しか知らない。

まあ、知れわたるのは時間の問題だろうと、佑一は離婚した後ろめ
たさはない。

それよりも妻のさげすみのまなざしの辛さにくらべれば、噂話の
主人公になる事など、取るに足らない事と思えた。

祐一へ入った夢

その夜、祐一は不思議な夢を見た。

仕事の疲れとワインの酔いから、熟睡しているのだが、夢が向こうから強引に入りこんだ。

入り込んだ夢は「神」が与える「救いの身業」である。

内容は祐一には覚えさせず、前世で犯した罪の「心理的感情」だけを残させ、そこから、再生させた現世で、救いの行動を起こさせる「神」が与える償いの業である。

神が人間に持たせた「潜在意識」に働きかける業である。

祐一は冬であるのに、汗を流しながら目覚めた。

「この悲しさはなんなんだ。」

虚脱感で目覚めた。

男は木々の間から、ある家族を観察していた。

男は、その日の早朝に、馬に乗った家族の主が山を越えたのを確認していた。

山越えは、帰って来るのに半日はかかる。

一時の時が流れ、主の妻が髪を束ね、川で夫の服を洗いだした。

名前はアンナと言った。

この国のこの地方の人々の服は、一重の襦袢のような衣を、腰に紐で結んだだけの出で立ちであった。

男とこの家の主は兄弟である。

男は長男で、早くに他界した両親の財産を、ほとんど受け継いだ。

この男の名はルドルフといった。

働かなくてもいい程の、財産の相続であった。

ルドルフは独り身であった。

さて弟の方であるが、親から受け継いだ唯一の財産は、町外れのこの土地だけであった。

しかし、堅実な弟は結婚し、妻と二人、質素に生活していた。

子供はいなかった。

弟の名はセバスチャンといった。

貧乏であるのに、兄に頼って来ない弟。

兄はそれが気に入らなかった。

「何かあるはずだ！」

兄は、その為にほとんど毎日、弟家族の不思議を探るべく、観察していた。

しかし、そこには何の特別はなく、平穩に過ぎる日常だけがあった。それを見続けて行くうち、男は徐々に、嫉妬の念に駆られて行った。嫉妬という悪魔が正当な視界を困惑させつつあった。

そして、とうとうその日、

「羨ましいだろう」

と誰かが、兄の心に囁いた。

うなずいた瞬間、悪魔が兄に入った。

兄は女の前に行くと言った。

「あなたの家で弟を待ちたいのだが。」

女は微笑んだ。

「親愛なるお兄様
さあ、どうぞ。」

女は自分の家に兄を迎えた。

女の本心は、夫を軽蔑していた。

「私は貧しい生活はいやです。

せめてお兄さんみたいなお金持ちの妻になりたい」

そう思っていた。

若くて美しい女の自由を、夫が奪っていると思っていた。

そこに、独り身で裕福な兄が来たのだ。

男の首には、金のネックレスが光っていた。

女にも、平穩の中に潜む、情性の油断という業が入り込んだ。

女は胸の前の服を少しはだけて見せた。

兄が動揺したのを、女は見逃さなかった。

女がわざと見せる、かがんだ胸の膨らみ。

そこから上目遣いに見せる誘惑の瞳。

女は一瞬、きらびやかな宝石を纏った自分の姿を想像した。

全てが入ってきたものの策略が進んで行った。

食べ物^が女によって運ばれた。

「弟は毎日、この女を抱いている
お前は兄

あの女はお前を待っている。」

男は女を押し倒した・・

女は抵抗するふりをした。

男は女のばたつかす腕、脚を全身で受け止め、制止させた。

唇で女の露出している肌を舐めまわした。

女は感じ始めた。

憧れの男の胸は厚かった。

抵抗が徐々に弱ってきた。

女は裸にされた。

二人に入りこんだもの達は、笑っていた。

女はその男に身を任せた。

二人は互いの身体を貪りあった。

行為は絶頂に達した。

そこに弟が帰って来た。

星座がきらめく夜空であった。

弟はそれらを眺めながら、家路を急いでいた。

家の近くまでくると、呻き声が聞こえる。

徐々に近づくことに、それが鮮明に耳に入る。

その声に合わせるように、木が揺れてゴトンゴトンとリズムカルに歩調している。

弟は、まさかそこに、自分の信ずべき者達の、不貞が織り成されているとは、夢にも思わなかった。

弟は、飼っていた牛の出産だと思った。

扉を開けた。

弟の落胆は、言葉にならない。

神も弟の人生を哀れんだ。

行為は遮断され、女は泣いた。

男は、その震えながら立ちすくむ弟に笑いかけた。

二人の間に沈黙があった。

信じていた者が、裏切りに走った現実には、弟は正気を無くした。

その後に弟は激情のまま、無意識に、包丁で兄を刺した。

一刀で血が脇腹から溢れだし、下にいた女に垂れ流された。

女は恐怖で上に乗っていた男を跳ね除けようとばたつかせたが、男は女を抱き締め、放そうとはしなかった。

血が跳ね退ける力を滑らせ、男の脇腹には、女の手跡が幾線も赤く書き込まれた。

呻きと叫びが家の中、また家の周りの草原に木霊した。

弟は三回、男を刺して外に出た。

初冬のきらめく星座の下で、弟は全身に返り血を浴びた姿で、その場に崩れ落ちた。

全てが終わった。

オリオンが極めて輝いていた。

幸せから絶望へ。

悟った瞬間、刃を自らの腹へ、一刀に突き刺した。

弟は、神を罵倒して息絶えた。

その時に祐一はハッと目覚めた。

しかし夢の内容は隠されていたため覚えていない。

恐怖心と虚脱の気持ちで目覚めたのだ。

祐一と亜利沙

祐一はその日、経理主任の山口亜利沙を食事に誘った。

祐一と亜利沙に関係のある人々から、完全に見られる事のない、会社から遠くにある高級フランス料理店を予約した。

祐一はタクシーから降りて店内に入ると、個室に案内された。

まだ時間が早いため、店にはお客が疎らだった。

個室からは、シャンソンが流れ、黒光のするテーブルやイスが高級感を与えていた。

壁の絵画は淡い海辺の油絵である。

程なくすると、亜利紗が到着した。

「遠くまでごめんなさいね。」

「いえいえ

今日はお招きいただきましてありがとうございます。」

亜利沙は満面の笑みを称えた。

コートを脱ぐと亜利紗は白のスーツ姿であった。

ヒールを履くと祐一よりも少し低い位の身長である。

華奢な体付きではあるが、大きな胸と細いウエスト、スカートから

伸びる長く細い脚。

コートを掛ける動作、スーツを脱ぐ時の了解を求めるタイミングなど、全ての行動と言動が、女としての品を漂わせていた。

社内の男達が魅了されるのも、改めて祐一にはうなずけた。

「場所はすぐに分かったかな。」

「はい、タクシーの運転手さんが知っていましたので。」

祐一はあらかじめタクシー代を亜利沙に渡していた。

お釣と領収書を手渡しながら、亜利沙はウェイトレスが引いた席に着いた。

「ありがとうございます。」

という気遣いも忘れない冷静さである。

改めて亜利沙と顔を向かい合わせると、その美しさに祐一は赤面する程のときめきを感じた。

「部長、この度はおめでとうございます。」

「いやいや、ありがとう。」

皆の頑張りのおかげだよ。

特に山口君には助けてもらった。

感謝するよ。」

「いえいえ、私なんかご指示に従っただけです。」

「そんな事はないけど、まあ今日はプロジェクトの成功祝いということで乾杯しよう。」

「はい、部長ありがとうございます。」

二人はワインで乾杯した。

バラード的なシャンソンの音色が会話を滑らかにした。

亜利沙は、祐一すら忘れていた細かい指示に対して、感謝を述べた。祐一は久しぶりに接する、女性の優しさという魅力、に心を奪われた。

前菜が運ばれ、二人はフルコースを楽しんだ。

見つめ合う二人の心は、時間と共に、より一層、近くなって行った。

「今日のお食事の事は、奥様はご存じなんですか。」

急に亜利沙は悲しい表情で言った。

「山口君、実は僕は離婚したんだ。」

「えっ・・・」

亜利沙は本当にびっくりしたようだった。

そして、悲しみの表情から嬉しそうな表情を作り、一瞬その少し潤んだ大きな眼を、祐一から逸して言った。

「じゃ、私にもチャンスがあるって事ですネ。」

下に逸した瞳が、輝きを持って再び祐一に注がれた。

ワインの酔いで亜利紗は一段と色つばさを増していた。

祐一はその言葉と表情に、言い尽くせない程の愛しさが沸いて来た。

肩まである髪を亜利紗はかき上げた。

髪から発せられる甘味な香りが、祐一には今まで嗅いだ事のない、天上の最高の香りだと思った。

店から出た二人は、肩を抱き合っていた。

タクシーに乗ってからは手をつなぎ合い、亜利紗は祐一の胸にもたれかった。

祐一は優しく肩を抱いてあげた。

ホテルに到着し、そこで初めて二人は結ばれた。

利沙の透き通る白い肌が、赤く熱を帯びながらベッドの上で官能のまま、なまめかしく、ゆっくりと震えながら動いていた。

祐一は優しく目の前の、愛しい肌に唇をゆっくりと重ねていく。

その度に、亜利沙の小さな唇から、感じるままの喘ぎ声があがって行った。

祐一は唇を全身に這わせ、両手で亜利沙の全身を愛おしむように擦っていく。

それに応えるように亜利沙は華奢な身体をくねらせ、悶えていった。

亜利沙の身体が弓なりになり、のけ反る。

その動作は時間と共に妖艶さを増して行った。

声はその動作と共有するように段々と大きくなる。

亜利沙は決して男を知らない身体ではなかった。

しかし祐一のように、心から愛されていると思ったのは初めてであった。

亜利沙は男女の営みで初めて絶頂という感覚を実感して行く。

祐一が愛しく唇でなぞってくれる場所、また愛撫している手のひらに触られる場所が、全部気持ち良さを通り越した「性感帯」になつて行くのを知った。

亜利沙が逝くたび、二人は長く唇を重ねあう。

登り詰めた後、祐一はエクスタシーが引いていく余韻を与えずに、亜利沙を優しく愛し続けた。

亜利沙に対する思いやりが何回も亜利紗を逝かせた。

結合する前に亜利沙は何度登り詰めたか分からなかった。

長い愛撫のあと、祐一は亜利沙の中に入って行った。

結ばれた状態で、祐一は亜利沙を抱き抱えた。

「亜利沙、愛しているよ。」

「祐一さん・・・

愛して・・・
ます・・・」

亜利沙は悶えながら言った。

切ない程の美しい声。

祐一は亜利沙の中を優しく突いていく。

亜利沙は、もう死んでもいい、とすら思えるほどの最高絶頂を生まれて初めて祐一から与えられた。

亜利沙の中に入ってくるものが、奥に入るたび、亜利沙は絶頂に何度も身体をのけ反らせ、歓喜の喘ぎを発した。

その動きは、優しい程にゆっくりしたものである。

あくまでも亜利沙の感情に応えたスピードである。

その日、亜利沙は最高の頂上に達した時に、祐一も逝った。

亜利沙は涙を流しながら、女性が発する声でない叫びをあげて逝った。

祐一も人間が出すことはない「獣」の声を出しながら逝った。

二人はこのように結ばれた。

亜利沙と真由美

二人が結ばれた夜。

祐一にまた、記憶を残さない夢が入った。

祐一の別れた妻である真由美がいた。

場所は公園である。

真由美は八才と幼かった。

真由美は泣いていた。

そこへもう一人、少女が現れた。

三つ違いの真由美の妹である。

妹は姉と遊ぼうとして姉の回りを走っている。

その中で幼い真由美は泣きじゃくっている。

妹は、姉に手を振りながら笑っている。

次の瞬間、猛烈なスピードで走って来た自動車が、妹を跳ねて逃げて行った。

妹は十メートル程、飛ばされた。

すでに死んでいた。

しかしすぐに妹は立ち上がった。

血まみれの妹はその場で回り始めた。

そのスピードは徐々に加速され、光を帯び始めた。

いつの間にか真由美はいなくなっていた。

その光は辺りを輝かせ続けた。

そうすると光の中から、成熟した女が現れた。

亜利沙であった。

亜利沙は満面の笑みを称えていた。

そこで夢は終わった。

事故で亡くなった妹は、亜利沙に生まれ変わっていたのだ。

姉である真由美が、自らの意思で新しい男を作り、結婚生活において、何の罪も犯していない男との結婚生活を、放棄した罪。

その結婚生活を、妹が復活させる事で、姉の姦淫の罪が許された。

「神の身業」は妹を亜利沙に蘇生させる事で、姉の罪を一つ取り除かせた。

後、姉に残された罪は「傲慢」

だけになった。

祐一は幸せな気持ちで目覚めた。

もちろん夢を見ていたことは記憶にない。

隣りには亜利沙がいた。

目覚めた二人は熱い口づけを交わした。

お互いに信頼が支配していた。

ここで神が人間に与える、”記憶に残さない夢”は「潜在意識」に働きかける。

人間が「恐怖心」を持つのは、実は神の「摂理」であるのだ。

真由美（アンナ）に入った夢

真由美が目覚めると、夫である誠がコーヒーを入れてベッドまで持ってきてくれた。

「おはよう、昨日は夜中にうなされて、夢の中で泣いていたけど、どんな夢を見ていたんだい？」

誠が言っている事が、真由美は何の事だか分からなかった。

「えっ、私が夢にうなされて、泣いていたの？」

そう言われれば、眼が腫れぼったい気がする。

「いいえ、私夢は見ていませんよ。」

「そう？ だったらいいんだけど・・・
さあ、リサを起こしてあげなきゃ・・・」

真由美は、心でまた吐いた。

夫の誠に対してある。

「出て行け！」

能無し！」

実は誠は、会社からリストラを受けていた。

要は無職であつた。

真由美はその事を聞いた時に、この夫に対して、嫌氣がさした。

「この男には、将来性を感じていたのにハズレたわ！

どれもこれも、ただ優しいだけ！

私は、パートナーには、名誉を求めるわ、私は社長！私の身の丈に叶って！」

と心で独白した。

この家族は、新しい生活に入っていた。

郊外のまだ自然が残る場所に、広い一軒家を購入した。

リサはまだ祐一の事を忘れられず、誠の事を「おじさん」と呼んでいる。

真由美もあえて誠のことを「お父さん」

と呼ばせる事もしなかった。

すでに夫に対して、軽蔑が生まれていたので、それは当り前の事であつた。

誠はリサを可愛がり、呼び方さえ気にしなければ、どこから見ても親子であつた。

その中に真由美が加われば、どこから見ても、家族であり、再婚同士の家族などとは見られなかった。

その過程で誠は失業した。

家族として成り立つものの中に、一家の長としての威厳がある。

しかし、誠は職が無い。

真由美は会社のオーナーである。

誠は途方に暮れた。

日に日に真由美の誠に対する軽蔑は、激しさを増した。

誠に対する”無視”は徹底されて行った。

昨晚、真由美の中に入った夢はこうである。

女は、目の前にある物々の前で笑った。

自殺した夫が遺した、家畜達のふくよかな蠢く躍動。

それらを、女の動向を気にしながら、世話をする使用人達。

女は心で、自殺した夫に対して呟いた。

「死んでくれてありがとう。」

同時に死んだ夫の兄の「財産」まで女に転がり込んだ。

また女は心の中で、弟から殺された身寄りのない兄に対して呟いた。

「殺されてくれてありがとう。」

女は一人で生きて行くには、十二分なお金を同時に得たのだ。

女は直ぐに、それらを元にビジネスをした。

それが当たった。

あくまでも女はしたたかであった。

裁判での席上にシーンが移った。

「私は犯されました。」

と女に入ったものが言わせた。

「あの日、あなたは行為をしましたね？」

「いえ！していません！

抵抗いたしました。」

「では罪は男にあると？」

「はい！」

裁判官のサンチェスは困惑した。

調査ではあの日

「町中に聞こえる程の喘ぎ声であった。」

「あんな愛の営みは聞いた事がない。」

「夫婦仲は最悪だった。」

などと聞いていたからである。

「あなたは自害した夫を本当に愛していましたか？」

サンチェスは問いた。

入ったものが言わせた。

「心から愛してました。」

「そうですね。」

サンチェスは諦めた。

しかし最後に良心を込めて、女に言った。

「自害した夫に感謝しなさい。」

また殺された義兄に感謝し、永劫に死ぬまで感謝し続けなさい。

富はあなたの物です。」

女は心で笑った。

女に入ったものは地上から天に向かって笑いかけた。

人間はこんなものだ

と天に向かって言った。

女は、転がり込んだ物々のおかげで、遊び墮落した。

心も身体も傲慢に膨れて行った。

使用人達は過酷な労働に泣いていた。

傲慢が、使用人達の「叫び」を遮断していた。

身体は贅沢で肥り、

ある日、とうとう、女はベッドに埋もれて動けなくなった。

贅沢で膨れた身体は、ベッドから身を起こす事も出来なくなったのだ。

女は仰向けのまま、天に向かって叫んだ。

「誰か助けて！」

当然、誰も助けには来なかった。

すると、突然突風が起こり、女のいる屋敷を吹き飛ばした。

そして光り輝くものが、天から現れた。

女はあまりの眩さに、目を開けていられなかった。

それはどのような形をしているのかすら、分からなかった。

光り輝くものが、女に言った。

「傲慢なる者

その元となるもので
清められなさい。」

というと、また突風が起きて、今度は飼っていた家畜の群れを宙に
浮かせた。

それから突風は、一頭づつ、女にめがけて落として行った。

肥えた家畜達が一頭づつ、起き上がれないほどに太った女の上に、
鈍い音を発てながら、落とされて行った。

女はその痛みに耐えられなかった。

「許して下さい。」

と叫んだ時、家畜達の落下は終わった。

突風は治まり、光の存在も無くなった。

すると、辺りが暗くなり、程なくして二人の男が現れた。

一人は別れた前夫の祐一である。

もう一人は祐一が幼い時に、死に別れた弟である。

祐一は繋いだ手を放し、弟を自由にした。

祐一は消えた。

弟はよちよち歩きで、女に近寄り、動けない変型した身体を粘土をこねるように再生して行った。

女はくすぐったい感覚を我慢しながら、再生を待った。

足が動かせるようになった。

すると弟は女の手を取り、地上に立たせた。

弟は女に微笑んだ。

女はやつと安堵感を覚えた。

そこに道が現れた。

二人は手を繋ぎながら、その道を歩いて行った。

ふと手の感覚が、子供のものから、大人の手に変わった。

女が横を確かめると、先程の裁判官のサンチェスが、凜として立っていた。

女はびっくりして、一度目を閉じた。

そして女が再度、横を見ると、誠に変っていた。

誠は笑みを女に投げた。

女はそれには応えなかった。

すると、道が急に途絶えた。

女だけが、誠の手をすり抜け、道筋が無くなり、落ちていった。

夢はそこで終わった。

真由美は虚脱感で目が覚めた。

神の摂理は、真由美の潜在意識に「傲慢の罪」を意識させた。

祐一の死んだ弟を、誠に蘇生させ、希望を失った男に対して、いかに愛せるか、という試練を与えた。

誠の霊は裁判官のサンチェスの蘇生である。

神はサンチェスの魂を一段上げるため、蘇生させた。

真由美の前世である、アンナの姦淫の罪は、死んだ妹を祐一に授け

る事で、すでに許されていた。

後、残る罪は、傲慢、である。

真由美が誠を愛することで、前世の罪は完全に許されるのだ。

神の「救いの身業」が真由美に入った。

真由美は会社に行く途中も、後味の悪い気持ちが支配していた。

何か重大な過ちを犯し続けている感じがしていた。

しかし会社に到着して、皆が社長である真由美に対して、気を使い、ピリピリしている。

真由美よりも歳が上の男達が鼻で動く。

若い男達は、真由美の美貌に見とれている。

若い女子達は、男を思い通りに操る技量に畏敬を感じている。

真由美はそう思っていた。

その様を見ると、それらの気持ちは、一瞬にして去って行った。

「私は無能じゃないわ。」

都心のビルの一、一流企業が並び、高階にあるオフィスから見える景色。

その都会の象徴の窓辺から空を見ながら、真由美は呟いた。

「私は社長よ！」

田中誠

誠は職が無くとも、日中、家に居る事はしなかった。

義理の娘であるリサが、小学校に行くのを見届けると、誠も家を出た。

妻の真由美は、仕事を理由に家を空ける事が多くなっていた。

誠が日中、新居を空ける理由は、もちろん周りの眼を気にしての事もあるのだが、それよりも新居のあの独特の臭いを嗅ぐのが辛かった。

新しい家族が出来て、心機一転、心を弾ませて購入した新居。

頭金は全て誠が払った。

全部の貯金を投入した。

前夫婦では子供が居なかったため、久しぶりに味合う家族団欒の楽しさ。

初めまして味合う子供との遊び。

そついう思い出たちが、新居の臭いの中に想念と連結し、条件反射のように浮かび上がるのだ。

全てが上手く行くと思っていた。

しかし半年後、誠は失業し、無一文になった。

真由美は自分の通帳を持っていた。

決して夫婦共有のものではなかった。

誠はアルバイトをしながら正業を探さざるをえなかった。

誠はハローワークに通い続けた。

誠にとって職は渴望するものであるが、本当に求めているものは、真由美の誠に対する愛の復活であった。

真由美は社長である。

誠はへたな職に就くわけにはいかなかった。

夫としての威厳を取り戻さなければならなかった。

真由美が納得する職に就きたかったが、この時代は不景気である。

誠は出口のない八方塞がりの境遇に、自己のふがいなさで押し潰されそうであった。

竹崎真一

その日もハローワークには、職を求める人々でいっぱいであった。

やっと求人情報を見れるパソコンが空いたのは、20分もしてからであった。

この場所にいる人達には笑顔がなかった。

皆、明日への生活に対して、不安を通り越えた恐怖心で、怯えているように誠には映った。

「僕だけでは無かった。」
と誠は安堵感を得た。

職員との相談は一時間待ちと表示されていた。

誠は求人企業の企業情報をプリントして、時間調整のため表に出た。

全く風が無い、晴天の空であった。

春の陽光が心地よく全ての物を照らしていた。

陽光をさえぎる場所の隅々までにも、それは明かりとしての恩恵を受けていた。

誠は近くの公園のベンチに座り、求人内容を確認していた。

誠は管理職募集の企業を探していた。

それもある程度は名の通った所を選んだ。

真由美が納得する企業じゃなくてはならなかったからだ。

突然そこへ、強い突風が起こった。

公園のブランコが、それに押されるようにギコツ、ギコツと音を立てて揺れた。

誠の手からプリントした、求人紙がすり抜けて行った。

それはゆっくりと舞い上がり、ゆっくりと落ちて行った。

誠はそれを取るために、小走りに落下する方面へ走った。

紙はスーッとある人物の手に収まった。

その人物は、駆け寄ってくる誠に笑みを返した。

風が治まった。

ギコー！

という音を出したブランコは、徐々に振幅を弱めて行き、そして何事も無かったかのように、音を消した。

その人の笑みは春風のように、爽やかであった。

誠よりも、十五くらい年上の、五十歳位の初老の男であった。

その男は、顔に満面の笑みを浮かべ誠を見た。

誠と目が合った。

誠はその笑顔のさわやかさに魅了された。

それと、離れた場所から男を見ると、とても大柄な人だと思った。

誠は丁重に礼を述べた。

「どうもすみません。」

「いえいえ、飛んで行かなくて良かったですね。」

誠は男の近くまでくる途中、何度も深々と頭を下げた。

男も帽子を取り、頭を下げて誠に挨拶を返した。

「はい、どうぞ。」

と笑顔で、紙を誠に渡した。

先程は大柄だと思ったこの男は、誠よりかなり身長は低く、中年にしては痩せていた。

誠自身が背が高いので、一般の男性の身長ではある。

帽子を取って会釈した頭は、髪の毛が頭の真ん中だけ無かった。

痩せてはいるが、腕は太く、顔と一緒に日焼けしていた。

「私もまだ、運動神経はありますね。」

と、誠に人差し指と親指で丸を作り、豪快に笑った。

誠はその豪快な笑いに、心が一瞬に明るくなった。

誠は忘れていた男としてのプライドが、この男を通して、蘇って来るのが分かった。

しばらくは不安な気持ちが忘れられる。
と誠は、男に心で感謝した。

「本当にありがとうございました。」

「失礼ですが、職安の資料ですか？」

「はい、お恥ずかしい話ですが、求職中でして。」

「なんの、全然恥ずかしくくないですよ。」

今の社会は弱いものイジメをしますからね。
胸を張りましょう。」

誠は感激した。

ここ数ヶ月、このように励まされた事がなかったのである。

辞めた会社では、出世頭の誠を良く思っていない派閥の連中と同僚達が、社内だけでなく、取引先までにも、ねじ曲げたウワサを吹聴した。

退社の挨拶をしに言っても、お茶すら出ては来なかった。

家で、妻の真由美から

「もうあなたは終わりね。」

と言われた時には、男のプライドが崩れ落ちた。

誠はそれでも、自らの気持ちを奮い起たせていたのだが、そろそろ崩壊寸前であった。

誠は込み上げて来るものを、懸命にこらえた。

「まあ、立ち話もなんですから座りましょう。」

と男は言った次には公園のベンチの方向に歩き出していた。

動作が機敏で、無駄がない。

男はベンチの端に座ると、左手を振りながら誠を迎えた。

二人は、六月のそんなには強くない陽光の中で、しばらく沈黙した。

先程の突風が、うそのように風は再び沈黙し、公園の隅々に咲く花達が、その色彩を競演している。

小鳥達が、何物も攻めてくる物がない安堵感で、間隔を空けながら、穏やかに仲間達と鳴いている。

新緑からこぼれる木漏れ日。

元気に遊ぶ子供達の笑い声。

平安という自然の空間が、二人の周りに存在していた。

誠は名前を告げると、再度先程のお礼を言った。

男も誠に対して丁寧に自らを語った。

「私は竹崎真一と言います。

しがない中小の社長をしています。

田中さん、何処かいいい所が、見つかりそうですか？」

男はベンチの隅に置いたスーツの内ポケットから名刺を取り出すと、誠に渡した。

（株式会社）タケザキ

代表取締役、竹崎真一

と書かれていた。

誠も長い会社勤めの習慣から、名刺を取り出そうとしたが、今は失業中であることに我に帰り、また自らを卑下する気持ちに戻った。

「いやいや、いいんですよ、時期に立派な名刺が必ず出来るでしょうから。」

真一は微笑みながら、誠に言った。

誠は男の言葉で、また救われた。

「社長さんでございましたか。
失礼致しました。」

誠はこの男、竹崎から受けるオーラに、やはりただの人ではなかった、と納得して言った。

竹崎は穏やかな表情を作り、誠に言った。

「いやいや、社長といつてもたいしたことはありません。
何か飲みましょう。」

コーヒーでよろしいかな？」

と誠の頷きを確認めると、竹崎は公園の入口にある自動販売機に向かって行った。

誠が小銭を取り出す暇も与えずに、俊敏に歩いて行った。

公園を颯爽と歩いて行く後ろ姿には、威厳があった。

陽光が竹崎の白いワイシャツに反射し、誠に眩しく反射していた。

竹崎は誠に缶コーヒーを渡すと、誠の今ある境遇について聞いてきた。

誠は何故か、この竹崎に対して”警戒心”という感情を持つことが無かった。

いや、それよりここ数ヶ月の、誠自身に降りかかった苦難を聞いてほしかった。

誰にも、気に止められず、聞かれる事すらなかった胸のうちを、吐き出したかった。

誠は一流商社に勤めていたこと、そこで派閥の罫によってリストラされたこと、妻のこと、妻と自分の立場、などを包み隠さず竹崎に伝えた。

その間、竹崎は始終、誠の目を見て、頷き、時に腕組みをしながら聞いた。

誠は、心の中にあつた鬱憤や不安などが、浄化され、心が晴れやかになって行くのを覚えた。

徐々に風が二人をかすかに触るように吹いてきた。

六月の草いきれの香りを含んださわやかな風は、強くなることはなく、一定の旋律で吹いて、彼方へと立ち去って行った。

陽光も徐々に、時間と共に強くなって来た。

「まあ、人には必ずと言っていい程、試練が来る。

誠さん、今がその時だと私は思いますよ。」

竹崎は笑顔で答えた。

何て澄んだ瞳なんだろう。

気持ち優しく包んで、吸い込ませる深海のような瞳。

誠はその言葉と瞳に、また救われた。

「あなたの妻が納得する仕事とは、具体的に何だと思いますか？」

竹崎は誠に聞いた。

誠は一瞬、答えに詰まった。

ストレートに伝えていいものだろうか？

誠は躊躇していた。

竹崎は誠の応えを分かっていた。

「奥さんの肩書に恥ずかしくない仕事とは？
何ですかね？」

それでは奥さんの人生だけに、荷担しているだけです。」

誠はハツとした。

ハンマーで頭を殴られた感じがした。

心の全体を覆っていた”不安””喪失””失望”といった”負の思考”が球体の中に入り込み、そして誠の意識の中で大きな音を伴って、破裂して行くのを覚えた。

「誠さん、全ては貴方の中にあります。」

この世の中では、決して神様が救いの手を差し延べる事はありません。

自らで解決しなければなりません。」

誠の心に何かが目覚めた。

落胆から昂揚する希望の光りが灯った。

「誠さん。」

面接は合格です。」

「はい？」

竹崎は、誠の肩に優しく手を置き、言った。

「井上祐一君は知っているね？」

「は、はい。」

「君が勤めていた時の、取引先の人間だね。」

誠は、突然竹崎の口から出てきた名前にびっくりした。

誠の妻である真由美の、別れた元夫であり、前職の会社での、取引先の会社の営業部長の名前である。

「はい、そうです。」

「祐一君が、田中誠という友達が失意の内にいるから、彼を助けて

くれ。

決してこの事は黙っててくれ。

彼は信じられる、俺の取引先の人間だから。
と言ってきた。

だから今日、君に会ったんだ。

祐一君は、私の大学の後輩だ。

ある日、私の会社に来て、面識もないのに、私に君の事を頼み込んだんだ。

名簿で調べたらしい。

私は同窓会の幹事だからね。

祐一君は僕と一回り違う。

勇気のある男だ。」

誠はその場所に崩れ落ちた。

そして大きな声を張り上げて泣いた。

その声は公園中に響き渡った。

遊びに夢中になっていた子供達も、遊びを止めて平伏して泣く誠を見守った。

竹崎は、嗚咽している誠の肩を、しばらくしてから、優しく抱き抱えてあげた。

「あなた達の関係は、私はそれ以上は知らないが、いい友達を持っただね。」

まるでお兄さんのように、心配していた。」

（後に分かる事だが、この出会いには、深いいきさつがあった事を、竹崎は誠には話さなかった。）

誠は心で祐一に詫びた。

「いうなれば奥さんを奪った形の俺なのに…
そんな俺の為に…」

そして誠は、この竹崎に、自分の人生の行く末を任せようと、その時「決心」した。

「誠君。」

竹崎はポンッと、誠の肩を叩いた。

「明日の午後一時に、私の名刺の住所に来なさい。」

「わ、わかりました。」

竹崎は、歩きだした。

そして突然、振り向くと誠に言った。

「君には浮浪者、ホームレスになってもらう。」

そう笑顔で言っていると、颯爽と去って行った。

誠は度肝を抜かれた。

つき動かされるもの

次の日、誠は市の中心から、電車で一時間ほど離れた駅に向かった。竹崎から指定された場所の最寄り駅である。

車で行かない理由は、電車の方が速いだろう、という予想と、その方が安上がりだと判断したからである。

誠は貧窮していた。

妻である真由美が、投げつけるように与える小遣いを出来るだけ使いたくなかった。

このまま行けば、竹崎から言われる前に、僕は浮浪者になるなど、下り電車の混み合った中で、やっと確保出来た吊り革を持ちながら考えていた。

主要駅でほとんどの人が降りていった。

電車は人がまばらになった。

ネクタイ族は皆無になり、それらしき女性もすかしながらいなくなった。

誠は車両の一番端の、三人掛けの隅に座った。

前には誰も座っていなかった。

電車の正面の車窓から、晩春の情景を、誠に与えた。

先ほどまでは、車窓からは、都会の無機質な造形色が覆っていたが、都会から離れるに連れ、自然の軟らかい、優しい顔を表して来た。

陽光が強く平地を照らしていた。

ビルの人工で塗りつくされた人間味のない色は無くなり、遠く緑の山々が、車窓の画面を、端から順に終わりなく、誠にパノラマのよう
に映し出して行く。

その手前には、稲穂が陽光に抱かれるように、凜として立っている
田園。

風は無く、電車の風圧がかかった稲穂だけ、順番にたなびき、また
毅然と立って行った。

川を渡る橋の下からは、キラキラと陽光が照り返しを誠に与えた。

誠は久しぶりに着たスーツの上着を脱ぎ、ネクタイを緩ませた。

（僕は何に、つき動かされているのだろうか。）

誠は自問した。

（確かに昨日は、奇妙な一日であった。

今の妻の前夫が、僕を心配して、ある男を紹介してくれた。

そして、その男が突然、昨日現れた。

そしてその男が、発した言葉の数々。

「面接は合格です。」

どのような会社かは、分からないが、その男の人物を観るに、そう悪い会社ではなさそうだ。」

（その時は、「この男に、自分の人生を任せてみよう」

と一瞬、思った。

しかし、

「君には浮浪者、ホームレスになってもらう。」
この言葉で、思考が混乱した。

そのような会社がある訳がない。）

しかしその時、確実に、誠が求めているものは、妻の体裁を繕うものであった。

会社を経営する妻の、そのパートナーに相応しい職業と肩書きを求めていた。

「奥さんの人生に負担していないかね？」

（竹崎真一の言葉で、僕は、自分の人生の使命という意味合いを、突き付けられたような気がする。）

真にやりたい事はなにか？)

電車は山の中腹に差し掛かると、稲穂達や、山々の木々を抱きしめるように、内側に旋回して行った。

植物達は、風圧で揺れ動いていた。

(「神様は助けてくれない。」

の言葉はすんなりと誠の心に入った。

その通りだ、神などいないのだから。)

竹崎真一が、笑顔の後に言った言葉。

「自分で解決しなければならぬ。」

当たり前の上に、誠はハツとした。

竹崎の俊敏な行動、仕草、言葉から発せられる気付きの言葉たち。

誠を導くように、竹崎真一は現れた。

昨日は、優しさに溢れたオーラが、誠を積極的な気持ちにした。

妙に竹崎真一の「神と浮浪者」という言葉の組み合わせが、誠には同意語に感じたのだ。

(とりあえず、行ってみよう。)

と昨晚、決心した。

誠は駅に降り立った。

ひと山越えた後にあるこの街は、四方を一面の田園風景で広げていた。

初夏の陽光が、青く規律よく延びた稲に降り注ぎ、地表から沸き上がる、灼熱の照り返しの熱風で、誠の回りを、塵気楼のように漂わせている。

その熱風の彼方に、町並みが揺れながら、存在していた。

誠は上着を肩に乗せながら、ゆつくりと、その塵気楼の幻影的な揺れる道を、ゆつくりと歩いて行った。

ファミリー

誠は汗を拭い、髪型を整えた。

大きな塀の壁が長く続き、その中央に株式会社 タケザキ と書かれた看板が建っていた。

大型トラックがゆづに2台は通れる門を誠は入って行った。

正面に工場が見える。

誠はその大きさに圧倒された。

工場前には大型トラックが五台停まっており、リフトでラッピングされたパレットを積んでいた。

敷地は、ちょっとした学校の運動場の広さはある。

その手前の右側に、レンガ模様の壁の、3階建ての綺麗な建物があつた。

「事務所」と書かれた看板が一階にあった。

誠は気後れする気持ちを振り払い、呼び鈴を押した。

ガラス越しに見える、下足箱の上には、豪華な花瓶に活けられた生花が、色鮮やかに四方に伸びていた。

すると、自動ドアが開き、一人の女性が現れた。

地味な紺色の事務服を着ているが、誠に放った笑顔が美しかった。

クリーム色の髪が腰まで伸びていて、華奢な身体ではあるが、ふくよかな胸、スラリと伸びた長い脚。

美人はこの世にはたくさんいる。

しかし、ここまで笑顔の美しさが、人の心を和ませる女性を、誠は知らなかった。

少しお腹が膨らんでいる。

妊婦と分かった。

（女性は身ごもると、ここまで優しくなれるんだ。）

誠は見とれてしまった。

女性は深々と笑顔を称え、お辞儀をすると、

「田中誠様ですね、当方の竹崎から伺っております。暑かったです、さあ、お入り下さい。」

誠は再びハンカチで汗を拭った。

たどり着いた安堵でいっぱいであった。

事務所内の来客用の椅子に案内された。

事務所内を伺うと、五人の男女が忙しく仕事をこなしている。

誠が腰掛けるとすぐに全員が、「こんにちば。」

と声をかけてくれた。

誠は今までに、多くの会社を訪問して来た。

しかしこの人達の笑顔に勝る企業を、誠は挙げることは出来なかった。

殺伐とした雰囲気がない。

全員が笑みを称え、各自が互いの仕事を手伝い、一つの関係するよ
うなチームワークで仕事をしていた。

ここに仕事をやらされているという、強制は無いように感じられた。

惰性や怠慢は見られなかった。

生きた職場とはこういうものだと思っただ。

それよりも竹崎という男の下に着くものは、こつも活かされるのだ
と、改めてその手腕に尊敬を抱いた。

先ほどの女性が冷たいお茶を運んでくれ、

「少々お待ち下さいね。」

というと、社長室に向かった。

ガラスのついたての奥が社長室で、女性が

「田中様がお見えです。」

と言った次には、

「おー、」

と社長室から飛び出すように現れた。

竹崎は誠に歩み寄りながら、

「場所は分かったか！待っていたよ、さあ。」

と手を取るなり、社長室へと連れていった。

連れていった、というより引きずっていったと言ったほうが当てはまっていた。

このテンポの速さに誠は好感を抱いた。
誠には無い行動力である。

好感は人間力としての魅力に変わり、憧れへと転化していった。

竹崎は社長室の真ん中にある応接テーブルのソファーに誠を促し、正面に座り、満面の笑みを浮かべた。

瞳の奥に、優しさが溢れた笑顔であった。

「早速、誠君の使命なんだけど…」

竹崎は（使命）という言葉を使った。

「ちょっと待って…」

竹崎は立ち上がると、

「アリサさん、冷たいのにして、あと冷えたオシボリもお願いします。」

と社長室のドアを開けたまま言った。

「はあい。」

と先ほどの女性が優しい口調で明るく返事をした。

この口調の裏側にあるほのぼのとした雰囲気からして、明るい職場であることが分かった。

すぐに冷たいお茶とオシボリが、先ほどの女性の手によって運ばれて来た。

「あつ、誠君、紹介しとくよ、こちらはあと三ヶ月だけだけど、受付を手伝ってくれている井上亜利沙さんだ。」

「初めまして、井上亜利沙です。」

頭を少し傾けながら笑顔で誠に深々と頭を下げた。

「ご覧の通り、あと三ヶ月で臨月に入る、それまでの間、

無理を言って手伝ってもらっているんだよ。

旦那さんを口説くのにも苦労したよ。」

竹崎は大声で笑った。

「誠君……」

竹崎は誠を直視すると、ニタツとした笑みを浮かべ、

「君を紹介した井上祐一君の奥さんだ。」

誠は気が動転した。

まさか、こんな事が…。

誠の妻の、前夫の再婚相手が、目の前に現れたのだ。

誠は運ばれてある、冷たいオシボリで顔から流れる汗を何度も拭いた。

しかし、竹崎は、その辺りの人間関係は知らない。

また亜利沙も、まさか目の前にいる男が、祐一の前妻の再婚相手などとは、夢にも思っではいなかった。

竹崎は、誠の驚きぶりを見逃さず、

「誠君、驚いただろう、井上祐一君が初めて訪ねて来た時に、亜利沙さんも同席していたんだ。」

その時に、身ごもっていて、会社を辞めたばかりだったんだけど、
うちは募集広告は出さないからね。

それで手薄な事務を手伝ってもらったことにしたんだ。」

誠は平静を装ったつもりだったが、この竹崎の洞察力に、どこまで
平静を装えたか分からなかった。

また本当の事をこの際、伝えようとも思ったが、亜利沙の祐一との

繋がり深さを考えると、今日は告げないほうが良いと判断した。

「誠君、それとレディーの前でオシボリで顔を拭くのは、いかんよ。オジサンぽいって嫌われるから、なあ、亜利沙さん。」

「
いうと体をのけ反らせて、大声を上げて笑った。」

亜利沙は、

「いえいえ、男性の汗は、女性にしてみればすごくセクシーですよ。」

と二人に笑みを与えながら退出した。

二人は再び対座した。

数秒の時間が流れた。

竹崎は視線を天井に向け、しばらくした後、ピタンっと両手でひざを叩いて、

「とりあえず、会社を案内しよう。」

僕について来なさい。」

と言っている最中には席を立ち、誠を外へと促した。

事務所から出て、奥にある工場内に誠は案内された。

手前側の開閉式のドアの前には、「調理室」と書かれた標札があった。

誠は歩きながら、一回深呼吸をして心を落ち着かせた。

その工場の回りには、モルタル造りの垣根が囲んでいた。

垣根の中には晩春を彩る花々が、整然と花色ごとに咲き乱れていた。

誠の嗅覚に花々の優しい香りが心を和ませた。

花々の一本一本が、陽光の中で、一段と鮮やかに凛とした生命力を育んでいた。

誠は、その花々が、この中で働いている人々の象徴であるような気がしていた。

空には雲一つない晴天であった。

ドアを開け、中に入ると、ガラスケースで仕切られた棚が、数段に分かれていた。

その棚の列には、一列に密封式の寸胴鍋が並べられていた。

それらの寸胴鍋には、近郊の地域が書かれてあった。

その奥に、開閉式の扉があり、手前に消毒液とマスク、あと衛星帽が置いてあった。

二人は入れる準備をすると、戸を開けた。

そこは調理場であつた。

白衣を来た男女が十人ほど、忙しく仕込みの準備に追われていた。

皆、四十歳は超えている年配の人達で構成されていた。

竹崎に気づいた一人が、

「あつ、社長、おはようございます。」

と大声で言つた。

すると全員が竹崎に向かい、

「社長、おはようございます。」

と、手を休め、一人一人が竹崎に対して握手を求めて来た。

「おう、今日も美味しそうな香りがしますね。」

と竹崎が言つと、とうに七十歳は超えていそうな、調理場で一番年配者であるう、痩せて腰の少し曲がつた男が、すぐに合いの手を入れた。

「社長、任せて下さいよ、それよりも我々の仲間を一人残らず連れて来て下さいよ。」

竹崎は親指と人差し指で丸を作り、

「了解。

それで今日は早速、我々の仲間を連れてきたんだ。
紹介するよ、田中誠さんだ。」

誠は困惑した。

ある程度は心は固まりつつあったが、まだ正式にここで働くとは決めている。

雇用関係の具体的説明もまだされてはいないではないか。

ただ自分がここに居るのは、竹崎真一という男に魅力を感じたことと、竹崎が言った言葉に、その答えがどういうものか確認するためであった。

特に（浮浪者）の意味は何なのか、ということが一番聞きたかったことであった。

竹崎が誠を紹介した後、調理場の皆がお互い顔を見合わせ、誠に言った。

「誠っちゃん、あんたスーツ買うのに前借りしたんかい？無理しなくていいんだよ。」

ここでは着れば何でもいいんだからね。」

年配の男がそう言うのと、誠のところに歩み寄って来て、握手を求めた。

「これも何かの縁だね、誠っちゃん、お互い頑張ろう。」

調理場の全員が歩みより、それぞれ名前を告げ、握手を交わした。

誠は思った。

この現場にも生き生きさを感じる。

竹崎という男から発せられるオーラが全てに生氣を与えているのだ。

今、皆と挨拶を交わしている最中でも、竹崎はニコニコと微笑んでいるだけだが、常に竹崎の身体からは光る輝きが出ているようである。

「皆、田中誠さんは（一般）なんだ、私に代わってスカウトで活躍してもらおうと思うんだ。」

「なに、（一般）かい！」

先程まで天ぷらを揚げていた、六十歳位の妙に顔が赤い小肥りで背が低い女が言った。

一同、一瞬困惑の表情になったが、すぐに歓喜の表情へと移り、納得するように相槌を打った。

「それは良いわ、今は六月だから、社長がいつも言われる通り、寒くなる十一月までが勝負だからね。
誠ちゃん、頑張つてや。」

と長老がいうと、それにつられるように、

「誠さん、頑張つて下さい。」

と合唱のように調理場内に響き渡った。

ここにも、やらされているという義務が感じられない。

誠は、今までの見てきた多くの企業と比較して、ここまでの理想郷としての、従業員の意思疎通とやる気が、確立している会社を見た

ことがなかった。

（彼らが手抜きを決してすることのない、顧客のターゲットはどのような層なんだろうか。）

誠は考えていた。

あと、

「竹崎は自分の事を（一般）と呼んだが、その意味はなんだろうか。」

竹崎は誠の肩を軽く叩きながら、外へと促した。

竹崎が片手を上げて、調理場から出ると、

長老が、

「さあ、みんな頑張るべ。」

と言うと、皆一同に、

「あいよ。」

と返事が返って来るのが、調理場を出ながら誠の耳に聞こえて来た。

誠は一種の高揚感をその言葉から与えられた。

誠は感動した。

調理場の外は、長い渡り廊下になっていた。

その向こうには、また大きく仕切られた工場の一画があった。

長い渡り廊下が終わりに近づくにしたがって、流れ作業にありそうな機械音が、リズムカルに徐々に大きく聞こえて来た。

扉を開けると、それぞれの機械から聞こえる音は、各々の工程に合った響音を交えて、誠の身体を震わせた。

工場は二階建てになっており、竹崎は脇の階段から2階の事務室に誠を案内した。

中には十個ほどのデスクが並べてあったが、誰もいなかった。

しかし、その事務室の奥にガラス張りで隔てられたオフィスがあり、二十人ほどの若い男女が、電話応答に忙しく応えていた。

観ると電話は引つ切りなしに掛かって来ているようだ。

しかし、ここの人達も、嫌な表情や惰性の心情がないように見て取れた。

竹崎は気付かれないように、前方にあるガラス壁に、誠を誘導した。ここから工場全体が眺められた。

「誠君、どうかね、このような工場が今全国で四つある。

今度、東北にもう一つ作ろうと思っている。」

「社長、一体なんの工場なんですか？」

観察すると、六つの工程で製品完成が成り立っている。

竹崎は誠に説明した。

まず二階から二カ所、ベルトコンベアで一つは小さい植木鉢、もう一つはサボテンと盆栽が運ばれる。

それぞれのコンベアは交差する機械の中で、鉢の中にサボテンと盆栽が綺麗に植えられて、手前側のコンベアに乗せられる。

そこで数人が検品作業をする。

すると綺麗に植えられた鉢達は、別の機械の中に運ばれて、鉢の回りにアクリル製のポシエットみたいなものを貼付けられ、コンベアで流れた先には白い封筒を収める人達が、素早くそのアクリルのポシエットの中に入れていく。

また検品があり、また機械の中に運ばれて、また検品。

最後にアクリルの真ん中に取り付けられたボタンからは曲が流れ、それを確認して、あとはパレットに重ねての出荷作業という工程である。

竹崎が誠に説明する表情には、常に製品を慈しむ表情があり、かつその持ち場を任せている従業員への感謝の気持ちこそを事細かに説明した。

「それで、あの封筒に送る人への想いを書いてもらうんだ。完全防水だから手紙は濡れないんだ。」

竹崎は誠に目をやると、微笑んで続けた。

「そしてタイマーがセットされていて、

送る人は手紙を開けてもらいたい日時を指定出来るんだ。
サボテンと盆栽は寿命が長いからね。」

誠は夢物語を聞かされている感覚であつた。

手紙を添えたプレゼントは、どこにもあるが、読んでもらえる日を
指定出来るなんていう話は聞いたことがなかった。

「夢の商品ですね。」

誠は率直な感想を述べた。

「そうだろう。」

ニコツと笑つと誠の肩を優しく叩いた。

休憩の時間を知らせるチャイムが鳴った。

「皆に紹介するよ、さあ。」

というで一階に誠を導いた。

先程の調理場のスタッフは、比較的年配の男女構成であつた。

しかしこの工場内は、下は十代と思える男女から、上は六十を明らかに超えているだろう男女が、均等に配置されていた。

総勢七、八十人はいた。

やはりここでも、人間の心の奥底にある、性悪なものや、邪悪なものを感じられない。

観ると、数分の休憩の終わりを告げるチャイムの時間まで、お互い同士、言葉を掛け合い励ましあっていた。

竹崎がチャイムと同時に、マイクを握ると、社長の存在に気づいた全員が、

「あつ、社長！」

と、皆まるで父親か兄弟を見るように注目した。

竹崎は先程、調理場で話したように、誠を紹介した。

やはり誠は（一般）であつた。

そして（スカウト）で拍手が起きた。

この会社は夢が、従業員を動かしていると誠は確信した。

「ここにあるかも知れない。」

と誠の心に直感が走った。

「善を持つて成せということ…?」

と内なる何かが、誠に言添えた。

「この職場の希望は…本物だ。」

誠の直感に確信が入った。

「使命とは……？」

竹崎が言った言葉が心を支配した。

「やらねば……！」

心が固まった。

従業員達の拍手は鳴り止まなかった。

カリスマ

竹崎と誠は社長室に戻った。

その日、その年初めての冷房が稼動された。

六月の陽光は灼熱のたぎる時間を超え、徐々に優しさを包む姿に変えつつあった。

テーブルに対座する二人に、窓の陽避けのブラインドの隙間から、陽光は斜めに侵入し、中央にあるテーブルまで忍び込んでいた。

「誠君、まあ、ざつとではあるがこれがタケザキという会社の一部だ。」

竹崎は置かれた冷たいウーロン茶を飲み込むと、背中をソファに寄りかけながら、誠に微笑んだ。

「この他に植物の農園が、全国で十五箇所、今、見てもらった製品工場が、北海道、関東、近畿、九州と四箇所。

それで今度、東北に新たに製品工場を作る計画なんだ。」

竹崎はゼスチャーを交えて、まるで子供のような高揚ある抑揚した声で話す。

「あとは運送部門、調理部門がある。

本社は東京の銀座だ。」

というと自らのデスクの上に置かれた、小さい箱を誠に持って来た。

「君が来たらすぐに作ってくれ、と事務さんに作らせたものだ。すぐに使って構わない。」

竹崎はその箱を誠の目の前に置いた。

「行く行くは、この名刺が役立つ時が来るだろう。」

名刺を開けると、こう書かれてあった。

株式会社 サコース

会長秘書室

マネージャー

田中 誠

誠は最初、この名刺の意味を理解できなかった。

株式会社 サコースは、誠の前会社などではとても相手してくれる急成長を遂げている会社である。

一部上場企業で常にプラスチックマーケティング部門では、利益率が日本でトップの会社である。

会長？秘書室？

頭が混乱した。

「誠君、このタケザキ以外にもう一つ私は会社を持っているのだ。」

竹崎はゆつくりと、作業服の内ポケットから名刺入れを取り出して、誠の名刺を渡した。

それにはこう書いてあった。

株式会社 サコーズ

代表取締役会長

竹崎 真一

誠は竹崎を見つめた。

昨日から誠の運命は激動しだした。

それはあの公園で、竹崎と会ってからである。

誠に記憶が蘇った。

誠は腰が砕けそうになるほど、驚愕した。

あのカリスマの企業のトップが、目の前にいるのだ。

激動を与えられた誠の心の許容範囲を、竹崎という男が超えさせた。

誠は身体が震えるのを懸命にこらえた。

サコーズの現社長は、三島一馬という五十八の初老の男である。

その社長交代は突然であった。

五年前、当時四十五歳であった社長の竹崎真一は、自らが育てあげた、サコーズの一部上場を機会に、社長を退くと宣言した。

当時、サコーズはプラスチック加工業で、世界規準の特許権を次々と取得し、世界からも注文が殺到するという昇竜の企業の、突然の社長交代である。

経済界はもちろん、多くのマスコミの注目的となった。

当時、専務取締役であった実弟の竹崎洋二が、エスカレーター式に社長就任となると、誰もが思っていた。

しかし竹崎は、三島一馬という中途入社、取締役としては末席の営業所長を、十人抜きで抜擢した。社長退任の記者会見から、わずか三日後の早業であった。

その時の日本は、ある意味で何も変わりのない平凡な日常が続く、考えれば至上の幸せが続く日々であった。

話題のないマスコミは、この交代劇に飛びついた。

新社長の初老の三島一馬を、苦労人の遅咲きのシンデレラボーイと崇めた。

返す刀の矛先として、崇拜の慰め役としてマスコミは、有りもしない、骨肉の争いと表題した、実弟の竹崎洋二を登場させた。

後の良識ある論調によると、新社長発表までの三日間は、信頼する弟を納得させるため、兄は涙で説明し、納得させたという。

もちろん、断り続けた三島に対しても、一緒の事をした。

現在は、専務取締役である竹崎洋二は、社長の三島一馬を助け、二人三脚でその業績は年を重ねる毎に上向いている。

気に入らないのは、飛び越えられた取締役たちである。

しかし、社長の竹崎真一は臨時取締役会議で言い放った。

「この人事に不満の方は、1時間以内に辞表を提出して下さい。」

社長の言は鋭かった。

顔は普段の穏便から、鬼の血相だったという。

一同はその迫力に愛想笑いを浮かべるしか無かった。

就任会見は、さらに圧巻であった。

経団連会館で行われた会見は、関係省庁、並びに各マスコミが整えたテーブルに、真ん中に新会長の竹崎真一、右に新社長の三島一馬、左には専務取締役の実弟である竹崎洋二が座った。

新会長の竹崎真一は、始終笑顔は見せなかった。

不機嫌に下を見つめていた。

会見は新社長の三島一馬が仕切った。

昨日までとは全く違う世界に放り込まれた環境の中で、新社長は理想とビジョンを、皆にわかりやすく、かつ、意地悪な質問にも丁寧に応えた。

会見が終盤に差し迫り、マスコミは会長に対して、最もこの人に対して、聞きづらい質問をしなければならぬ時が迫っていた。皆、竹崎真一の迫力に押され、中々質問出来ないでいた。

とうとう、一人の若い経済誌関係の男が、勇気を絞って言った。

「お聞き難い質問ですが、新会長にお尋ねいたします。」

会場は息を呑んだ。

「普通は同族であります専務取締役の竹崎洋二さんを、新社長と考えると思うのですが、それをあえて今回の人事に踏み込んだ理由はどこあたりにあったのでしょうか？」

カメラのフラッシュ音がこの時、一斉に集中した。

その言葉を受けた新会長は、今まで下に向けていた顔を上げた。

睨みつけるように、鋭い眼光がその記者に注がれた。

記者たちは、そのオーラに一瞬身を引いた。

その一瞬の、睨んだ写真をマスコミは後に好んでメディアに使った。

新会長は、ゆっくりと立ち上がると、報道陣を睨みつけた。

そして、ゆっくり睨みつけたまま、テーブルに両手を着けて言った。

シャッターは更に、連続撮影でフラッシュを切っていた。

「君達の常識はそんなものかね？」

竹崎真一は、記者たちを、ゆっくりと右から左に睨みつけた。

シャッター音は止まり、皆その表情にたじろいだ。

その時、初めて竹崎真一は笑みを浮かべ、大声で笑った後、説き聞かせるように言った。

「何の事はない、簡単な事です。」

竹崎真一はもう一度、記者たちを見回した。

そして隣に座している、実弟の専務取締役の竹崎洋二に眼を向けて言った。

「弟はまだ若い、経験がまだ足りない。」

竹崎真一は反対に座す新社長の三島一馬を見て、

「その点、新社長の三島さんは苦勞を重ねた思いやりの人物である。

対人に対しての気配りが出来る人である。

私はそういう人に社長になってもらいたいだだけだ。
以上。」

簡潔な応えであった。

記者たちは何も返す言葉が出なかった。

その場で壇上の三人は、固い握手を交わした。

各自とも、表情が柔軟になった。

会場は拍手喝采に包まれた。

シャッター音が、その中に凄まじい光と共にたかれた。

「これで会見はよろしいかな？」

新会長の竹崎真一が言った。

「会長、最後に一言お願いします。」

一人の記者が言った。

「おいおい、まだあるのかよ、執こいね。」

おどけるように新会長が言つと、壇上の三人はもちろん、会場全体が声を上げて笑った。

それまで会場の空気は、張り詰めた冷気が漂う、暗雲漂う冬空のようであったが、竹崎のこの一言で、一瞬に夏の晴天の青空の下に導きだされたような雰囲気になった。

竹崎真一は、そのようなオーラを持っていた。

「すみません。」

会長は退任された後のスタンスは、経営には一切係わらないとの事ですが、何か別の事をお考えですか？」

「君、嫌な事を聞くね。」

竹崎真一は笑って応えた。

会場はまた笑いが溢れた。

「新社長と専務にお願いして、系列会社を作ってもらうよ。」

「えっ！」

記者たちは再び沸き返った。

竹崎はそれを制止するように、

「いやいや、すぐにではないよ。」

皆さんが困った時に出てきますから。」

竹崎真一は笑って言った。

「では、これにて。新サコースをよろしくお願いします。」

と言って会見は終了した。

誠はその事を思い出した。

新聞や雑誌で、凜とした凄みで写っていた写真を思い出した。

そして目の前に、その時の凄みなどまるでない、柔和な竹崎真一がいるのである。

誠は、動揺する心を振り払うように立ち上がった。

「サコーズの会長様とは知らず、大変失礼致しました。」
と言って深々と頭を下げた。

数秒の後に、誠は恐る恐る、頭を上げた。

すると竹崎はポカンとした表情をしていた。

そこには凜として睨みを効かせた、写真のような男の姿は無く、中年の作業服を着た、どこにでもいそうな気の良い工員が、不思議そうに誠を見ていた。

「へえ、誠君、サコーズっていう会社、知ってんの？」

誠は真面目である。

多少の冗談と演技で逆に、誠の気持ちを落ち着かせてあげようとした竹崎の演技であったが、誠はその、誰でも答えられるであろう質問に、バカ正直に応えた。

「会長、何をおっしゃるんですか。
少なくともビジネスマンで、サコーズを知らない者はいません。」

最近はオリジナルのキャラクターがコマースシャルで人気を博しております。小学生でも知っております。」

「へえ、そうなの？」

バカな前社長が居なくなってから、そんな事もやっているんだ。」

竹崎は身体を揺すりながら、大声で笑った。

「…会長、決してそんなことは…」

「誠君、光が眩しいね、ちょっと待って。」

竹崎は立ち上がると、窓辺の方向に向かいながら言った。

「へえ、僕よりも詳しいね。」

「いえ、会長の前だから言う訳ではありませんが、サコースが日本より海外で評価されていることが特に特出される所だと思います。」

竹崎はゆっくりとブラインドを上げながら笑顔で応えた。

誠は続けた。

「まず、一般的にはアメリカ始め、ヨーロッパ各国の先進国と取引しようとするのが通例です。」

しかしサコースは違いました。

東南アジア、アフリカの途上国を重点的に取り引きを始めました。

僕はその気概だけでもすごいと思いました。」

竹崎はブラインドを半分まで上げた。

そして誠の方を振り返って、

「ほう、最高のお褒めの言葉、ありがとう。」

竹崎は大きく一礼した。

そして大声を出して笑った。

そこには確信という喜びが入った分、普段の笑い声よりも大きかった。

（この男は出来る！

核心を突いている。

考えてみれば何百人もいるどの社員も、先進国との事ばかりを私に進言して、途上国の事はおざなりにした態度であった。

先進国など、私が行かなくても勝手に生き延びる。

しかし、企業としてもそうだが、人として心を傾注しなければいけないのは、弱い立場の人々を手助けすることなのだ。

これで二人目だな、途上国に着目した男は。）

竹崎は心の中で、計画の半分が達成したと思った。

欠点は真面目すぎることだが、これは毎日のミーティングでなんとなかなる！

竹崎は結果の模様を頭に描いた。

ちなみにそのもう一人の、途上国に着目した男とは、サコーズの現社長である三浦一馬である。

決断

「まあ、誠君、座つて。」

竹崎は、窓から見える景色を眺めながら言った。

会社の敷地には、芝生が広がり、その真ん中に、青々と繁った葉を持つ大木が、一列に、一定の間隔を保って、並んでいた。

陽光が部屋一面に入り込んでいた。

誠の視界から見える竹崎を、陽光はすっぽりと入るように照らしていた。

竹崎の全身が、陽光の輪の中に入っていた。

その輪は、得体の知れない、尊厳なものに誠は感じた。

それは、見てはいけない封印された絵画、とでもいうような尊厳なものようであった。

長い竹崎の影が、座った誠を覆い隠していた。

竹崎はブラインドを下ろした。

陽光が遮られた瞬間、竹崎の皮膚から放たれていた光りの蒸気も遮断され、輪郭が元に戻された。

誠は、夢を見ている感覚から覚醒した。

竹崎は席に着くと、誠に尋ねた。

「誠くん、先程うちの従業員を紹介しましたが、あの人達の前職は、何だと思いますか？」

「前職ですか？」

「そうです。」

誠は意表をつかれた。

考えてもいなかった質問である。

誠は”試されているのか”と不安になった。

先程の人達の顔を思い浮かべてみた。

まず全員が優しい。

そして仕事に対して皆、一生懸命である。

ということは（愛社精神）が、他社が真似できないレベルにある。それと竹崎は

「うちは募集広告はかけない。」

と先程言っていた。

これにより、サコーズから回って来た人達であることは分かった。

しかし、一律に（前職）と聞かれても分かるはずなかった。

誠は答えを導くヒントを探したが、その解答を引き寄せる、みち糸すら見出だせなかった。

明確な答えを捜せば捜すほど、糸の先端の点すら逃げて行った。

「誠君、意地悪な質問だったね。すまん。」

というと、体を前のめりにして、誠に近づいた。

「誠君、私はあの人達を尊敬しています。もちろん愛しています。」

「は、はい。」

誠は答える義務が無くなったことに、安堵した。

「あの人達の、前の姿になる経緯は人それぞれです。」

竹崎は誠の目を凝視して言った。

その目が、凝縮された哀れみに変わった。

「倒産した中小企業の経営者、無念にも借金を背負った人、最愛の方を亡くして精神的に参った方など。

人生の経緯の中で、そうなった過程は様々です。

また、今の世の中、誰でもそうなる可能性を秘めている。」

突然、窓の外の大木の枝の繁みから、鳥たちがバタバタと飛び立ってこちらに向かってきた。

そして鳥達の影達は、竹崎の背中に吸い込まれてから、まるで彗星のように一団となって、昇天して行った。

「誠君、あの人達は…」

「はい。」

「全員、無職。」

「…はい？」

「全員、浮浪者だったんだ。」

「…浮浪者！」

「ホームレスだよ。」

…なんという事が。

誠はもう一度、先程の人達の顔を記憶の中に呼び出した。

（俺は甘ちゃんだ。まだ住む家があるうちから、心が砕けている。調理場の長老の曲がつた腰には、どれだけの壮絶な人生があったろうか！

揚げ場の小肥りのおばさんの赤ら顔に、想像もつかない秘密があるのだろうに！）

誠は恥ずかしくなった。

しかし、それはすぐに消えた。

その代わりに、身体の芯から熱いものが湧きだし、体内に何かが充滿したのを覚えた。

それは使命感であった。

「驚いたかな？」

「…はい、正直、驚きました。」

「嫌になったかね？」

竹崎は悲しい表情を作った。

「いえ、逆です。」

誠の返事には数秒の間も無かった。

その応えの後、竹崎の目が潤んでいく時間は、秒単位に深くなって行った。

「だから僕は”一般”なんですネ」

「ははは、そうなんだ、誠君と亜利沙さんが”一般”だ。」

「で僕がホームレスの人をスカウトするんですね。」

「やってくれるか？」

「もちろんです。」

「これは仕事というより、人間の使命感に近いものがあるから、苦しいよ。」

「腹は決まりました。」

「まだ誰も歩んだ事の無い道だよ、マニュアルなんて物は無いんだよ。」

「大丈夫です。」

「彼等の中に入るから、ホームレスになってもらうよ。」

「会長、すでに僕の心はホームレスですから。」

「おう、そうか！」

二人は笑った。

徐々にそれは大きくなった。

社長室の外からも、クスクスと押し殺したような笑い声が聞こえた。

二人は立ち上がり、握手を交わした。

竹崎は強く握り絞めた。

誠もそれに応えた。

竹崎は誠の両肩に手をやり、言った。

「愛を持って助けよう。」

「はい。」

誠は力強く応えた。

陽光が二人を祝福するように、影を一つのものとしていた。

二人はすぐに打ち合わせに入った。

「誠君、マニュアルは無い。

だから君が作って行く訳だ。

じゃ、私の意向をこれから話す。」

竹崎の表情は険しくなり、気のいい工員から経営者の顔へと変貌した。

妥協という脆弱な温室の果実ではなく、自然の風雪の産物である流水のように、厳しい表情であった。

竹崎は誠の前に、すでに竹崎本人が作っていた計画書を出して説明した。

「まず、世間が見捨てた人々に再起の機会を与える。

動機は政治屋が動かなければ、我々民間が動く。

ちなみに私は政治家とは、あいつらの事を言わないから承知してくれたまえ。

コンセプトは、”愛を持って人を救う”だ。

次に第一スカウト期間を12月までとする。

要は冬までに生きる意思がある人達を全員救う事、家の無い人々がどうやって厳しい冬を生き延びられるかね？

竹崎は時々、計画書の紙面には無い、本人の感情も話しながら、進

めて行つた。

次にスカウト条件は基本、誠君に一任するが、私の意向は”生きる意思のあるもの”。

誠君は銀座のサコーズの本社に出社して、調理部が作った弁当をホームレスの人達に届け、本社に専用室を設けるから、毎日私に連絡すること。

すでに向こうの役員には連絡済みだ。

当座の資金として、明日、二千万円振り込む。

半分、給料とし、残りはスカウトの資金として使ってくれ。

第二期は、また別に振り込む。
以上。」

「まあ、こんなものかな？」

表情が元に戻り、誠を見つめて微笑んだ。

「会長、報酬は一千万ですか！」

「ダメか？」

第一期がそれだから、二期分も含めると二千万だが……
少ないかね？」

誠は恐縮した。

「いや、あまりに多いので驚きました。」

竹崎は大声を上げて笑った。

「ろくな仕事もしない政治屋たちが、いくらもらっていると思うんだい！それに比べたら安いもんだ！もちろん昇給はして行くよ。君は馬鹿正直だな！」

と言うと、先程以上の厳しい顔で、

「これは仕事を超越した”使命”なんだ。

君は、もうすぐ人々から”こじき”扱いされる。

また夏は酷暑の中、冬は吹雪の中、彼等の生活の中に入らねばならない。

どこに愛する社員を、そのような地獄の中に放り出す馬鹿社長がいるかね？」

竹崎は誠の肩を優しく叩くと、自らの肩を震わせ、号泣した。

徐々に陽光は赤く染まりかけていて、二人を優しく染めていた。

誠はこの人のためという、二つ目の使命感を心に強く刻んだ。

誠ももちろん号泣した。

その後、ミーティングは夕方の日の暮れる寸前まで続いた。

晩春の、晴天の地平線はその姿を赤く染めて、対岸に位置する空面は薄青く、徐々に星座を煌めかせつつあった。

二人のいる室には、落日の熟成された陽光が、華麗に充満しており、熟考の会話の余韻に相まって、二人の頬を赤くメーキングしていた。

「じゃ、明日からスタートしよう。」

「承知致しました。」

再度、二人は握手した。

メーキングされた頬に、安堵の微笑みが加わった。

「ところで誠君、明日から当分、家を空けることになるが、奥さんはいいいとして、子供さんは大丈夫か？」

「大丈夫です。」

妻は社長で、十分に余裕はあります。」

「そうか、今日はたつぷりと娘さん孝行をしなきゃね。」

「ありがとうございます。」

竹崎はデスクに置かれた封筒の束を持って来て言った。

「誠君、この封筒は今日届いた、お客様からのものだ。」

だいたい一日に三十から多い時には百通も来るときもある。

中にはクレームもあるが、ほとんどがお礼の手紙だ。

コピーするから読んどいてくれたまえ。読めば総てが分かるよ。」

「わかりました。」

誠が竹崎と固い握手をして、会社を出たときには、日が暮れかかり、夜の闇はまだ未熟であった。

竹崎の計らいで、タクシーで帰った。

その頃には、空には、きらめく夏の星座が鮮やかに輝き、闇は成熟へと向かっていた。

団欒

家に着くと、妻である真由美とリサが、食事を取っていた。

前もって、面接で遅くなるということを、誠は真由美に伝えていた。

（今日は家にいてくれという、了解であった。）

真由美は名目は社長であるが、今では決定前までの仕事は全部、部下が遂行していた。

真由美は企画の提案と、それらを決定する印鑑を押すだけであった。

よって真由美は気ままに、一人旅をしたりして家を空ける事もしばしばであった。

誠がいなくなった後、リサの面倒をみる時間は、いつでも作れるのだ。

テレビの音しかしないダイニングを開けると、リサは誠の顔を見るなり、駆け寄って来て、抱き着いて来た。

「お帰り、おじさん！」

「ただいま、リサちゃん。」

今日はおじさん、お迎え出来なくてごめんね。」

誠は、頭を撫でながら言った。

「うん、大丈夫だったよ、今日はママが、お家にいてくれたの！」

真由美は振り向きもせずに、箸を口に運んでいた。

「そこにあなたの分がありますから、よそつて食べてください。それと今月分のお小遣い、靴箱の上に置いときますから。」

真由美は食べかけの茶碗を流しに持って行き、リビングを後にしようとした。

この間、誠を見ることは無かった。

「仕事が決まったよ。」

今から出張に行く、帰りは何ヶ月後になるか分からない、リサを頼む。」

誠は背中越しに真由美に言うと、リサを席に戻し、

「おじさんはしばらく帰れないけど、お利口さんになっているんだよ。」

とリサに言うと、口をへの字にして、

「早く帰って来てね。」

としたを向いて悲しい表情をした。

真由美はドアに掛かった手を離し、腕組みをしながら振り向き、誠を見て言った。

「会社の名前は？肩書きは？」

矢継ぎ早に質問した。

もし俺が、一流企業の会長室のマネージャーとでも言ったら、この

女はどのようなアクションを興すのだろうか？

「タケザキという小さな会社の人事担当だ、役職はない。」

真由美は呆れたように下を向いて、そして深いため息を一つついた。
数秒たって、顔を上げて言った。

「お給料の事は聞かないわ…」

まあ、頑張ってください。」

と言うと、ドアを大きな音を立てて、出て行った。

誠は考えた。

真由美は誰が見ても美人である。

そのふくよかな体には、女としての妖艶なフェロモンが常に排出されているように、いつ会っても油断を許さない”備えられた美”がある。

顔が小さく、等身に換算すれば八以上はあり、その彫りの深い目鼻立ちから、エキゾチックな雰囲気を漂わせる。

しかし、今日会った、調理場の小肥りの女性の”赤ら顔”とどちらが魅力的な人間か、と尋ねられたとしたら、今は迷わずに後者であると、自信を持って答えられた。

誠は、今日の経験だけで、物事を心眼で見る事を会得していた。

誠は、リサと一緒に食事をし、風呂に入った。

そして一緒に話し、ゲームで遊んだ。

一緒に考え、そしてたくさん笑った。

時間はあっという間に過ぎ、リサをベッドに寝かせた。

誠はリサの寝顔を眺め、将来に祈った。

「心ある女性になるんだよ。」

誠はバックに詰められるだけの下着と、竹崎からもらった資料だけ詰め込んで、ジーパンと長袖のワイシャツ、それと白いテニス帽子を被って家を出た。

闇は成熟しており、日中の陽光の熱は、人々が快適にある分だけ残し、天上へと帰っていた。

天は、夏の星座が支配していた。

それは駅まで向かう誠の足元を、街灯と共に照らしていた。

道すがら、窓辺の向こうから、親子、夫婦の会話や笑い声が聞こえて来る。

それは、窓から洩れる明かりの数だけ聞こえて来た。

誠は駅の前で、深く深呼吸をした。

晩春の凜とした空気が体中に、また心全体に染み渡った。

誠は自らに語りかけるように、心の中で呟いた。

「私に与えられた使命だ。」

手紙、一

その夜、誠は都心近くの下町の安いビジネスホテルに宿を取った。

部屋は和室になっており、入ると四畳半の畳みの真ん中に、布団がすでに敷かれてあった。

誠は全裸になった。

毛布を剥ぎ取り、身体に巻き付けてみた。

「しばらくは、この感触ともサヨナラだな。」

慈しむように、頬で感触を確かめた。

日に干された、陽光の残り香の臭いがした。

それは、生まれた時から嗅ぎつづけた臭いであり、どの人生のステージに於いても、自然から与えられ続けた温もりであった。

「当たり前の中に入っている、自然からの贈り物。」

切羽詰まらなければ分からない、自然かの賜物。

誠は思った。

死ぬ前に嗅ぎたい臭いは？
と聞かれたら、なんの躊躇もなく

「日に干された布団の臭い。」

と答えるだろうと。

確信した。

誠は竹崎から渡された、お客からの手紙のコピーを、鞆から取り出した。

最初は布団の臭いと共に、布団の中に包まって読んでいた。

しかし、一通目の後半からは、知らないうちに正座をしていた。

剥き出しになったモモの上に、大量の涙が流れ、モモを伝って敷布に流れて行った。

時は静かに過ぎ、誠の噉り泣きを、深夜の凜とした空気が、吸収して行った。

宿の外では酔っ払い達が騒いでいた。

手紙・一

突然のお便り、失礼致します。

私は先日、夫をガンで亡くしたものです。

私が二十歳の時、二つ上の夫と結婚をして、そろそろ金婚式（五十

年目）を迎える前の、夫の他界でした。

夫は無口でした。

これといって何も取り柄もなく、定年を迎えた後も、囑託として長年仕事一筋に頑張った人でした。

そんな矢先、夫はガンに侵されました。

苦しい闘病生活のそんな中、去年の私の誕生日に、夫から小さな、盆栽の鉢をプレゼントされました。

「これ！」

と言っていつも渡されるプレゼントですが、毎年楽しみな行事でした。

そしてこの鉢植えが、夫からの最後のプレゼントになってしまいました。

その時には、ガンは末期でした。

三ヶ月後、夫は息を引き取りました。

最後は苦しみを伴っていましたので、その喘ぎ声のうちに他界しました。

最後の言葉は、聞き取れませんでした。

夫を失ってから生活は、あの人の笑顔や仕種を回顧しながらの日々。

私も早く向こうに行きたいという気持ちでいっぱいでした。

そんな寂しい日々を送っていたある日。

あの奇跡の日を、私は向かえました。

私に生きる希望を与えてくれた日。

それは、生きていれば、金婚式の当日でした。

朝食を済ませて、一人でお茶を飲んでいました。

午前八時でした。

いつも夫が出勤する時間でした。

そうしますと、突然リビングの窓辺の方から、夫の声が聞こえて来
たんです。

窓辺には生前、夫からプレゼントされた盆栽の鉢植えしか置いてま
せんでした。

夫は私の名前を呼びながら、

「。。。子、今までありがとう。」

と繰り返しているんです。

驚いて鉢を見ますと、横の膨らんだ所の先端が開いていて、中に封筒が入っているではないですか！

その封筒を取り出すと、録音は止みました。

恐る恐る、また封筒を戻すと、懐かしい夫の声がまた再生されました。

私は咄嗟に、

「あなた！」

と叫び、涙が溢れました。

夫が、最後に伝えた言葉だったと理解出来ました。

さらに、封書を見ますと、私の名前が書いてありました。

裏には夫の名前が書いてありました。

私は涙で濡れた手でハサミを使い、綺麗に封筒を切って、中を開けました。

中には夫が生前書いた手紙が入っていました。

こう書いてありました。

それもあの人の字で。

「。。。子、金婚式ありがとう。」

そして、今までありがとう。」

夫らしい短い文章でした。

タケザキ様

この度は、このような素敵なプレゼントをありがとうございました。

寂しくなったら今では、あの人の声をいつでも聞けます。

あまりにうれしく、どうしてもお礼の一言を申し上げたく、一筆し
たためました。

これからもどうか、皆様へ夢をお与え続けますこと、
お祈り申し上げましてお礼とさせていただきます。

- 札幌市より -

誠は次の封筒を開いた。

手紙、二

手紙、二

どうしてもお礼が言いたくて、お手紙します。

僕は住み込みで、料理の修業をしているものです。

僕は中学の時にぐれていて、親に迷惑をかけていました。

就職も、父が頼み込んで、やっと許可してもらった日本料理店でした。

料理の修業はつらく、僕はいつも店の寮を逃げ出す事しか考えていませんでした。

入店して二ヶ月後の僕の十六才の誕生日の日、突然両親が店にやって来ました。

近くまで来たついで、とだけ言ってすぐに帰ってしまいました。

その時は、はつきり言って、うざかったです。

わざわざ、何にも出来ない俺を見に来やがったんだ！

なんて怒りに近いものがありました。

その時に、

「この店にずっと根付くように。」

と、サボテンの鉢を置いて行きました。

その日、親方が僕を呼んで話してくれました。

「。。。親が子供を心配するのは当たり前のことだ。

ご両親は本当はお前を抱きしめたかったろうな。

なぜ、早く帰ったか分かるか？

お前の心が折れるのを心配だったんだ。

優しい言葉をかければ、お前は親に甘えて家に帰るだろう、と心配したんだ。

今は辛抱するか、逃げるかの境目だ。

ご両親、最後に、

「よろしく願います。

と言って泣いていたぞ！

来年、二人を招待する気持ちでやってみろ！」

僕は部屋に戻って、両親の気持ちを思って泣きました。

それから僕は、一生懸命頑張って修業しました。

そんなある日、突然母が死にました。

交通事故でした。

言えないほど、悲しかったです。

絶対に俺の料理を食べさせてあげるといふ夢が、半分失くなりまし

た。

一年が経ち、僕の十七歳の誕生日が来ました。

親方のご好意で、父を店に招待出来ました。

僕の夢が叶う日。

僕は前日から、心を込めて父のために仕込みを始めました。

その時、親方から、

「バカヤロー！」

お二人様分だろうが！

と怒鳴られました。」

その時は（無駄なものにな？）としか思いませんでした。

当日、父は僕に、

「去年送ったサボテンの鉢を俺の横に置いてくれ。」
と言いました。

腕を振るった会席料理が始まりました。

水菓子を、そしておしぼりと日本茶を出し終え、僕の夢が果たされました。

と、その時、

父の横にあるサボテンの鉢から、

「。。。君、お誕生日おめでとう。」

と父と母と一緒に言ってくれているのです。
それも繰り返し、繰り返し。

父は俯いて、大粒の涙を流していました。

僕は何が起きたか分かりませんでした。

すると父が、

「封筒が二つ入っているから、後で見なさい。」

と言いました。

父は親方に、まるで頭を床に付けるかのようにしてお礼を言い、喜んで帰っていきました。

その夜、僕は封筒を開ける前までは、喜びよりも、失敗せずにやり遂げた達成感の方が強かったです。

それから、ゆっくりと封筒を手にしました。

そこには父からと、母からのそれぞれのボールペンで書かれた手紙でした。

去年の誕生日前に書いてくれたものでした。

今は亡き母の手紙には、こう書かれていました。

「。。。ちゃん、今日のお料理、とっても美味しかったわよ、世界一。」

父も、

「美味しかったよ。」

と書いてくれてました。

父も母も、去年から今日の事を見越して書いてくれていたんです。

涙が溢れました。

そして思いました。

「なんて俺は馬鹿なんだろう！

親の気持ちも分からずにグレやがって！」

そしてすぐに気付きました。

親方の

「二人分」

の意味が！

そして、鉢植えのボタンを押すと、母の声がいつでも聞けます。

くじけそうになると、いつも母の声を聞いています。

タケザキ様

この度は、父と母に最高の親孝行が出来ました。

このご恩は一生忘れません。

本当にありがとうございました。

- 福岡市 -

その後、誠は残り全部の手紙を読んだ。

それにはどれにも感謝の言葉と、それに至ったそれぞれの人生が書かれてあった。

誠は「タケザキ」

で働く従業員達の、愛社精神、勤勉、熱意などを新ためて理解した。

「もう一人では泣くまい。」

誠は心に誓った。

「全員で感動の涙を流すまでは。」

夜の闇は、最高の暗闇を過ぎ、徐々に朝の明るさを増しつつあった。

誠に入った夢

その夜、誠に記憶に残らない夢が入った。

夢の主は、ベッドに横たわっていた。

口に酸素吸入機が付けられていた。

口に入る空気は、冷たい水分を多く含んでいた。

回りには沢山の機具があり、それぞれが甲高いセンサー音を響かせていた。

夢の主は、横に少年が立っているのを見つけた。

その少年は、泣きじやくっていた。

黄色い帽子を被り、幼稚園の制服を着ていて、胸に「井上祐一」と書かれた名札をしていた。

涙がポタポタと、黄色いバッグに落ちていた。

（あつ、お兄ちゃんだ。

僕はなぜ、起き上がれないの？

今すぐにでも、お兄ちゃんと遊びたいのに！）

と思った瞬間、夢の主は、

その現場を斜め上の空間から見ていた。

センサー音も、急に足の下に移動した。

横にいたお兄ちゃんも、下に行ってしまった。

しかしすぐに、夢の主は、魂が横たわった肉体から飛び出して、宙に浮いている事を理解した。

お兄ちゃんの後ろで、抱き合うパパとママが見えた。

二人とも泣いていて、パパがママを抱きしめている。

（パパ、ママ、お兄ちゃん！僕はここにいるよ！）

と夢の主が宙から叫んだが、聞こえていないようだ。

すると白衣を来た男が入って来て、さっきまでの夢の主を、じつくりと触っていった。

しばらくして、ゆっくりと、口に嵌められた酸素吸入機を外した。

そして手を合わせて、頭を下げると、部屋から出て行った。

高みから見ていた、夢の主は、何度も何度も家族に叫んだ。

突然、目を開けていられないほどの、眩しい光りの世界が現れた。

その光りは、総ての空間を支配した。

夢の主の回りも、光りの世界に覆われた。

すると、先ほどまで下に見えていたものが、幻影のように消えようとしていた。

夢の主は、パパ、ママ、お兄ちゃんが、段々と平面の写真のようになって、小さくなり、そしてとうとう、点の中に吸い込まれて行ったのを、悲しく確認した。

光りの源は、二本の木であった。

その輝く木の前に、一人の真っ白な一重の服を着た男が、ひざまづいていた。

その男も、少しばかりの光りを放っていた。

夢の主は、男のすぐ後ろにいた。

「サンチェス、あなたの魂を向上させます。
あなたには、蘇生した後、また数多くの苦難が待ってます。」
と輝く木が言った。

すると輝く木、サンチェスと呼ばれた男、夢の主を、覆う透明な球体の輪が出来た。

それからその輪の外で、黒色、灰色、白色の無数の玉が現れ、透明な球体の輪にぶつかって、割れて行った。

中から、人間の型をした裸体者が現れた。

決して透明な球体の輪は、それらの侵入を許さなかった。

裸体者達は、男でもなく、女でもなかった。

多くの球が現れ続け、花火のように、輪に衝突し弾け、あっという間に裸体者達が、ウジ虫のように沸き上がっていった。

裸体達は、無言であった。

いつの間にか、裸体達が、輪を囲ってしまった。

二重にも、三重にもなってあふれた。

サンチェスと呼ばれた男は言った。

「ありがとうございます。」

輝く木が言った。

「苦難の後、私はあなたに、多くの人を救う指命を与えます。

サンチェス、見てみなさい。

輪の外には、あなたに救われたい魂たちが、溢れています。

行きなさい。

行つて魂を救い、勇気を与えなさい。」

と言うと、二つの木は一体となり、輝きを増した。

「ありがとうございます。」

とサンチェスは言う、振り向いて、夢の主に向かい、歩き出した。

ゆっくりと、穏やかな眼差しとともに歩いて来た。

大きく手を広げ、夢の主を抱きしめようとした。

男が、夢の主の中に入った。

夢はそこで終わった。

誠は味わった事のない充足感に満ち、目覚めた。

輝く木の想い

光り輝く木の最終目的は、人間たちを、楽園と言われる幸せな国に導く事である。

楽園は、邪悪な魂が侵入出来ないように、結界が施されてある。

結界は、見渡す限りの大きな川である。

そこには幾つかの門がある。

それぞれの門の前には、光り輝く木が選んだ、善の心しか持たない、み使いたちが立っている。

地上での役目を終えた人間の魂は、み使いの前に導き出される。

そして、どのような霊も、労りの言葉を与えられる。

やがてみ使いは、川を渡らせる為に、船に乗るように、霊に勧める。

み使いは、魂に、

「何事があつても、赦してやるように。」

と、言って送り出す。

そして、楽園に入る為の、最後の試練が待っている。

川には、風も音も流れも無く、明かりが川面を眩しく照らしている。

ゆっくりと船は川岸から離れ、動き出す。

向こう岸は、白い霧の壁に覆われていて全く見えない。

すると、自ら歩んだ下界の生活が、川面に映し出されていく

霊は懐かしさで、映し出される映像に食い入る。

もちろん見たくないステージもあるが、映像は隠さず映していく。

始めは霊の善行が、映し出される。

細にわたり、霊魂たちが忘れていた事まで、細かく記憶されている。

その次に待っている映像は、霊魂たちの悪行である。

ここで発狂するかのように、頭を抱えて船の上で懺悔する者がほとんどである。

その時、懺悔する霊魂は、生前に犯した罪が、その時に許される。

しかし、川面に映し出された者に対して、大声で罵声を浴びせる霊魂がいる。

叫びは、聞くに耐えない罵倒の羅列である。

そこで悔やむどころか、憎しみが甦り、川面に写る者に対して、拳を振るう者もいる。

憎しみが走った瞬間、船がゴムのような軟体物になり、その霊を、

球のように包み込む。

そして、川の奥底にゆっくりと廻りながら、沈んでいく。

輝く木が、最後の悔い改めを与えたにも関わらず、憎しみを抱いて、地に落ちて行く霊魂たちは、後を絶たない。

その昔、セバスチャンも、この川で球になった。

その兄であるルドルフも、セバスチャンの妻であるアンナもそうであつた。

輝く木は、愛の存在である。

セバスチャンの霊魂を、井上祐一として蘇生させた。

次の人生では、

「人をも、自らも殺すなかれ」と祈りを込め、玉を割つた。

セバスチャンの妻であるアンナの霊魂を、真由美として蘇生させた。

次の人生では

「自分のように、人を愛するように」と願いを込め、玉を割つた。

さて、裁判官サンチェスであるが、彼は玉に囲まれる事なく、川を渡りきつた霊魂であつた。

しかし、川を渡つた世界では、一番下の層にいた。

神は魂の力を上げるために、誠として蘇生させた。

次の人生では

「行動で人々を助けなさい」

と祈りを込めて送り出した。

蘇生された靈魂たちは、純白に再生させられて、喜び舞うように、螺旋の軌道を描いて、地に放たれる。

地に着く間、次の人生で関わりを持つ靈魂たちが、集まってくる。

その軌道は、うねりを増し、蘇生を喜ぶように光り輝くのだ。

ここで、弟の妻を汚した、セバスチャンの兄であるルドルフであるが、まだ罪に対する苦しみの償いが終わっていないため、蘇生は許されていなかった。

第二章・ホームレス

その都市には、街を象徴する大きな橋があった。

全長、八百メートル、幅、五十メートル。

常に豊潤な川を挟んで、勇壮に立っていた。

用途は、都市開発という生活目的であるがために、高さは特記する程では無かった。

片側だけで、三車線あり、歩道では五、六人が、余裕で並んで歩ける大きな橋であった。

この橋の向こう側の、巨大なビルの間から、朝日が昇りつつあった。陽光が、その存在を強調して行くに連れて、ビルの方向に、車が徐々に走り出していた。

しかし、橋の手前には、高層ビルはなく、人々が生活するに必要な、商店街が駅を挟んで、幾つもあった。

その大小はあれど、どの地方にもある、縮図である。

そして、そこには、必ずホームレスも少なからず居た。

言い訳の出来ない、弱肉強食の縮図であった。その日の真夏の太陽は、朝から気力をみなぎらせて、地にあるものを焦がすように炙っていた。

すでに橋の上のアスファルトからは、朝露の恩恵を消化させて、陽炎のように、ゆらゆらと揺れる熱気に姿を変えさせていた。

通勤の車や、自転車が、男が歩いて行く逆の方向に、慌てているように走っていた。

男は両手いっぱいスーパーの袋を持って、歩いていた。

橋を歩く者達は、俯いて歩くその男から、逃げるように避けて進んで行った。

テニス帽子を深く被り、ヒゲが伸びて、俯いて歩く男。

長身で痩せており、ジーパンにサンダル、真夏なのに長袖のワイシャツ。

誰が見ても、橋の向こうの人種ではなく、こちら側の人間であることは分かった。

陽光が川の面に照り返されて、男を下からフラッシュを炊くように輝かせる。

男の歩みに迷いが無いため、熱気の揺らめきの中に映る姿は、照り返しのフラッシュバックも手伝って、修行僧のように崇高であった。

男は橋の下にある、八畳程のプレハブの中に、躊躇せずに入った。

途中、河川敷の一画にある、ダンボールの中の住人達に、袋に入っている弁当を渡して行った。

どんなにしゃべりかけても話してくれないが、弁当だけは無言で受

け取った。

閉め切られたプレハブの扉を開けると、二人の男女が、カーペットの床に座っていた。

誠は扉を開けっ放しにした。

人数が加わる事で、法に守られていないこのハウスの防犯が、例え外敵が現れても、安全な人数体制になったからである。

蒸し風呂のような熱気に、人の汗の臭いが混ざった生臭い空気を、橋の影に浄化された清風が、あっという間に押しやって行った。

プレハブの窓には、目隠しで段ボールが貼られてあった。

その隙間から日差しがカーペットにジリジリと威光を示していた。

「おう、誠さん、いつも悪いね。」

歳は五十くらいのお腹の出た男が、片手をあげながら微笑みを持って言った。

「本当よね、今お茶を出すわ。」

と男より十歳くらい若い、痩せぎすの女が慌てて立って、コップとお茶のある棚に向かいながら言った。

差し出した弁当は、皆にはコンビニの賞味期限の切れた弁当を、ラッピングを変えて譲ってもらったのだと言っていた。

本当はサコーズの本社で、タケザキの配送部が、誠に毎朝届ける弁当であるのだが…

誠は靴を脱いで、真ん中にあるコタツ用のテーブルに、袋に入った弁当を置いて座った。

女は振り向いて、相方の男の作業着にふけがこびりついているのを確認すると、

「お兄ちゃん、せっかく誠さんが持って来てくれたお弁当にふけが入るじゃない！」

と背中を叩くと、男は今度は頭を照れ臭そうに掻いた。

「こら！おやじ！入るってば！」

女は誠を見て、声をあげて笑った。
つられて男二人も声をあげて笑った。

女はいつも髪で顔半分、隠していた。

顔面神経痛で、時々覗く顔半分は、頬を中心に引き攣られており、能面のように動かなかった。

二人は兄妹であつたが、その仲睦ましい振る舞いは、夫婦のようにすら思えた。

会話にはいつも笑いが堪えなかった。

この二人がどのようにして、こうなつたかはまだ誠は聞いていなかった。

聞く糸口が掴めなかったのだ。

「誠さん、それじゃいただくね。」

このふけ入りがまた美味いんだ。」

「汚い！ジジイ！」

妹が冗談に、軽く背中を叩いて応える。

二人がこのプレハブで生活するようになって、心の張りが生まれていたのを、誠は感じていた。

まだ二人と深くは話していないため、名前すら分からない。

ただ二人が兄妹であり、妹は兄の事を「あきら」と呼び、兄は妹の事を「あけみ」と呼んでいた。

誠もそこではそう呼ぶようにしていた。

しばらくすると、二組の男女が数分後に入ってきた。

「おはよう、おっ、誠さん来てたんだ。」

四十代半ばの、背の低い痩せた、目が大きくて窪んだ男が、先程まで漂っていた生臭い臭気を持ち込んで、誠たちの輪に加わった。

「皆、おはようございます。」

これ四人からの差し入れです。」

と言って連なって入って来た女は、先程の男よりさらに身長は低く、さらに痩せていた。

歳は男と一緒にであった。

二人は一緒の灰色の作業服を着ていた。
朝からの厳しい熱さに、服は水を浴びたように、今にもカーペットにしたたり落ちるようであった。

労働から解放された満足感からか、二人の顔に作ったシワの線を、更に笑顔の深い溝を作って、輪に加わった。

「川夫さん、川子さん、身体拭くタオル洗つといたから、どうぞ。」
と、あけみは二人の前に、川で洗って干したタオルを置いた。

ここでは、お互いが手に入るもの、または手助け出来るものを提供して、生活していた。

もちろん、過去の人生は、暗黙の了解として問わないルールが出来上がっていた。

この男女は夫婦であり、名前が川崎であることは、二人の会話の情報として皆は知っていた。

呼び合う名前が、男が川夫、女が川子なのは、単純に、川崎さんの夫で川夫、奥さんで川子。
皆、熟考することなく、単純にそう呼んでいた。

ここでは、名前すら存在価値は無いのである。

それからすぐに入ってきたのは、ここには場違いなほど綺麗な品のある、二十代後半の女であった。

身体はどちらかというところぽっちゃりとしていて、肉付きがいいが、ウエストが細く、お尻が大きいので、くびれが目立ち、すけ口の湿りが色気を引き立てていた。

身長は夫婦の川夫より高く、女の色気を漂わせていた。

「皆さん、おはようございます。」

今日は昼間は地獄の熱ですよ。

あきらさん、あけみさん、誠さん、注意して下さいね。」

「ローザちゃん、大変やったね、はい、ロング君と一緒にしとい
たから。」

あけみは座ったローザの前にタオルを置いた。

「あけみさん、いつもすみません。」

続いて入って来た男は、肩まで髪の毛が伸びており、挨拶する前に、皆の輪の中にはいり、

「いやいや、大変でしたよ！夜中なのにすっげえ熱帯夜、これから
の人は倒れないで下さいね。」

これ、川夫さんたちと僕たち四人からの差し入れです。」

と、輪の中心にあるテーブルに、パックに入っただけのものを置いた。

「おう、皆さんありがとうございます。」

と先にプレハブにいたあきらたちが言うと、作業服を着た四人が軽く頭を下げた。

ロングと呼ばれた男が、

「ほんと、ハンパないっすよ、これですもん。」

とそのひよる長い身長の、細い首に付けていたタオルを外して絞る真似をした。

「あれ？でない？」

「あんた！馬鹿じゃない？この熱さでしょう！汗だって蒸発するの！わかった！」

ロングは淋しそうな目をして下を向いた。

「皆さん！本当に馬鹿でしょう！すみません！」

とローザが言うと、一同に大爆笑を与えた。

この二人は恋人同士である。

話では、女はクラブのホステスであつたこと。

男はバーテンダーで、そこで二人はいい仲になったとのこと。

呼び名は、男はロングの髪の毛からロング、女はホステス時代の源氏名からローザと呼ばれていた。

「さあ、皆揃ったところで食べますか！頂きます！」

とみな談笑の内に食べはじめた。

灼熱の太陽は萎えることはなく、地表を炙りつづけていたが、河原に生わった木々や草花を元気に、鳥たちは囀り、虫たちは元気に飛び回っていた。

蝉が途切れる事なく、鳴いていた。

食事が終わると、後から入って来た四人は、近くの公園から汲んできた水で、身体を拭いて、深夜の仕事のために睡眠に入り、あきらとあけみの兄妹は、昼の仕事に向かった。

もちろん橋を渡る事はなかった。

誠は橋向こうのビルに、清掃のバイトがあるという事になっていたため、橋の向こう側に歩いて行った。

誠専用の執務室がある、株式会社サコースの自社ビルへと向かって行った。

誠はホームレスになって、一ヶ月が過ぎていた。

駅に通じる道は、歩道と車道が並行して並んでいた。

そこに、右に北口、左に西口と別れる分岐点がある。

そこはホームレスの人種も分かれる、選別の場所でもあった。

歩道にはみ出すことのないように、右にいるホームレスたちは新聞紙だけが持ち物である。

ここにいる者たちは、目が宙に浮き、口からはよだれをたれ、中にはパンツ一つで寝ている者もいて、いつ自らが汚物を排出したか分からない者までもいる。

もはや生きる気力も無い者が、集まっていた。

クリーム色の壁が、何も答える訳もなく、滑らかな表面にすがりつくホームレスたちを、よだれを潤滑油として、滑り落としていた。

生きる氣力を捨てた人々が集まる地帯である。

左側の人たちは、何かしらの持ち物を持っていて、ダンボールで人が座れる位の高さで、家を形成していた。

ダンボールハウスと呼ばれるものである

ダンボールハウスを作る行為は、個人の生活を確保するという事であるが、本当の理由は、通行人からの視線を阻止するためである。

上からの目線に晒され、自らへの侮蔑が心に充満する。

例えばそれが子供の眼であつても、心に蘇生された卑屈は充満のアリ地獄から、はい上がれない。

憐れみの眼差しであつても、屈折した心が屈辱と理解する。

人の一瞥の数だけ、卑屈に苛まれる。さいなま

屈辱は、恐怖心になる。

ここまで来れば、人を殺す手段は、一秒の一瞥だけで充分であつた。時代は、これらの人達を助ける行政上のシステムを、持っていなかった。

いや、かえって助けるどころか、行政機関は「山狩り」と称する「段ボールハウス」の一斉撤去を、定期的に行っていた。

それは美観を理由にした、政治家たちの市民へのカモフラージュであつたが、当の浮浪者たちは決して驚きはしなかつた。

また手際よく段ボールを繋ぎ合わせ、数分でハウスを作ればいいだけであつたからだ。

誠は最初に、左の段ボールの住人の場所で生活を始めた。

誠も一ヶ月の間に、二回、ハウスを崩された。

その度に、先程のプレハブにいた、兄妹の”あきら”が誠のハウスを作ってくれた。

あきららは誠だけではなく、プレハブの他の二組のハウスも作つてあげた。

この三組の浮浪者たちは、一番奥まつた一画に、まとまって生活していた。

そこへ誠が加わつた後、誠は橋の下に、近くの建築会社からもらったと言つて、プレハブを用意した。

そして誠は、その三組の男女を招き入れた。

その日から、山狩りに苦しめられることは無くなった。

人の目線に苦しめられることも無くなった。

日雇い労働でわずかなりともお金が手に入る。

それぞれが好意に甘える事なく、懐中電灯、カセットコンロ、布団、茶碗など提供していった。

近くの公園の水道で、洗濯や身体を拭く事が出来た。

贅沢からはもちろん嫌われていたが、そこには最低限の生活があった。

皆に少しの笑顔が戻った。

しかし、正常者としての再起には、いくつものハードルがあることは皆、分かっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2524y/>

ラセン

2011年11月20日21時42分発行